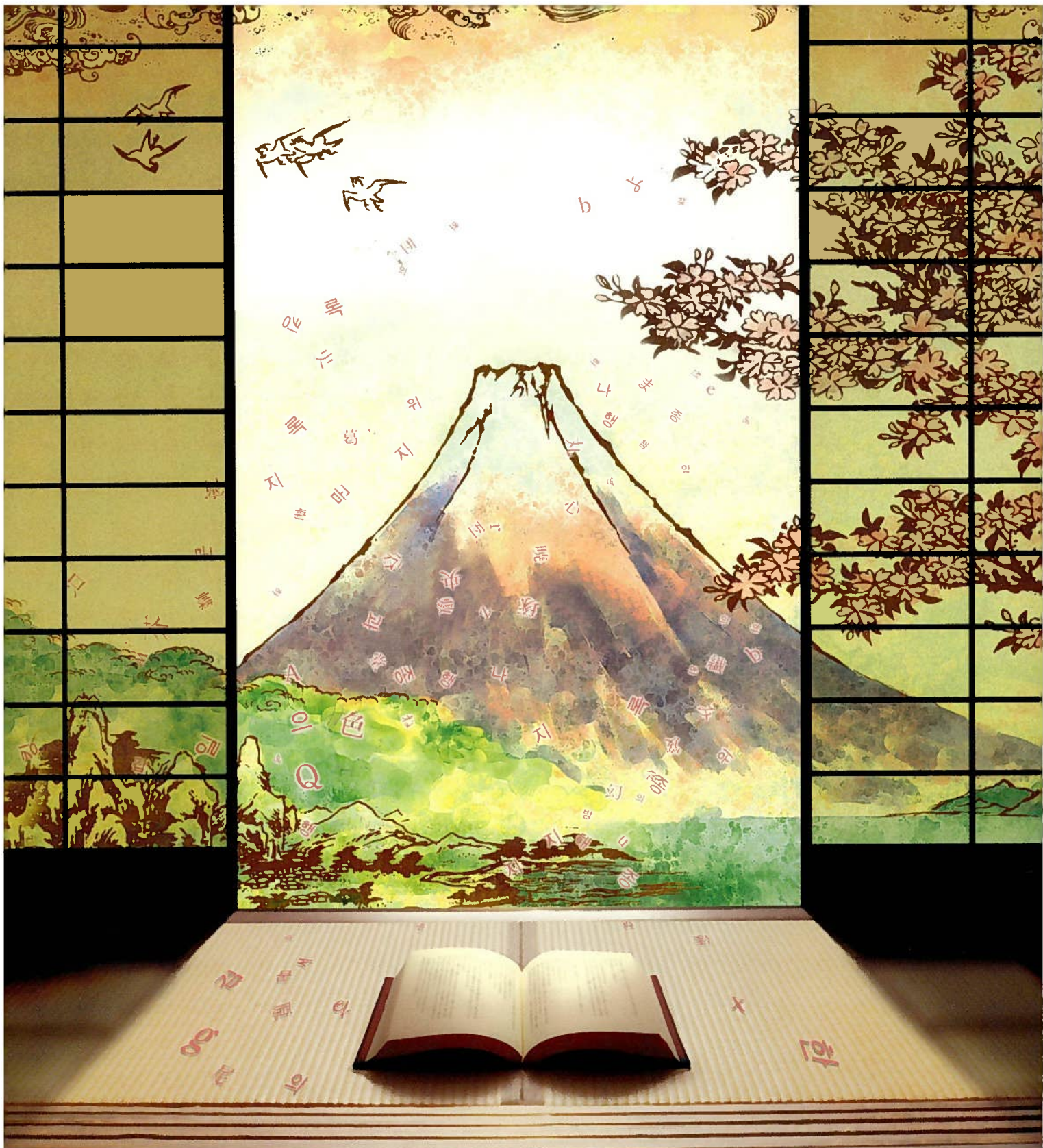




第4回しずおか世界翻訳コンクール

2001-2002, 静岡

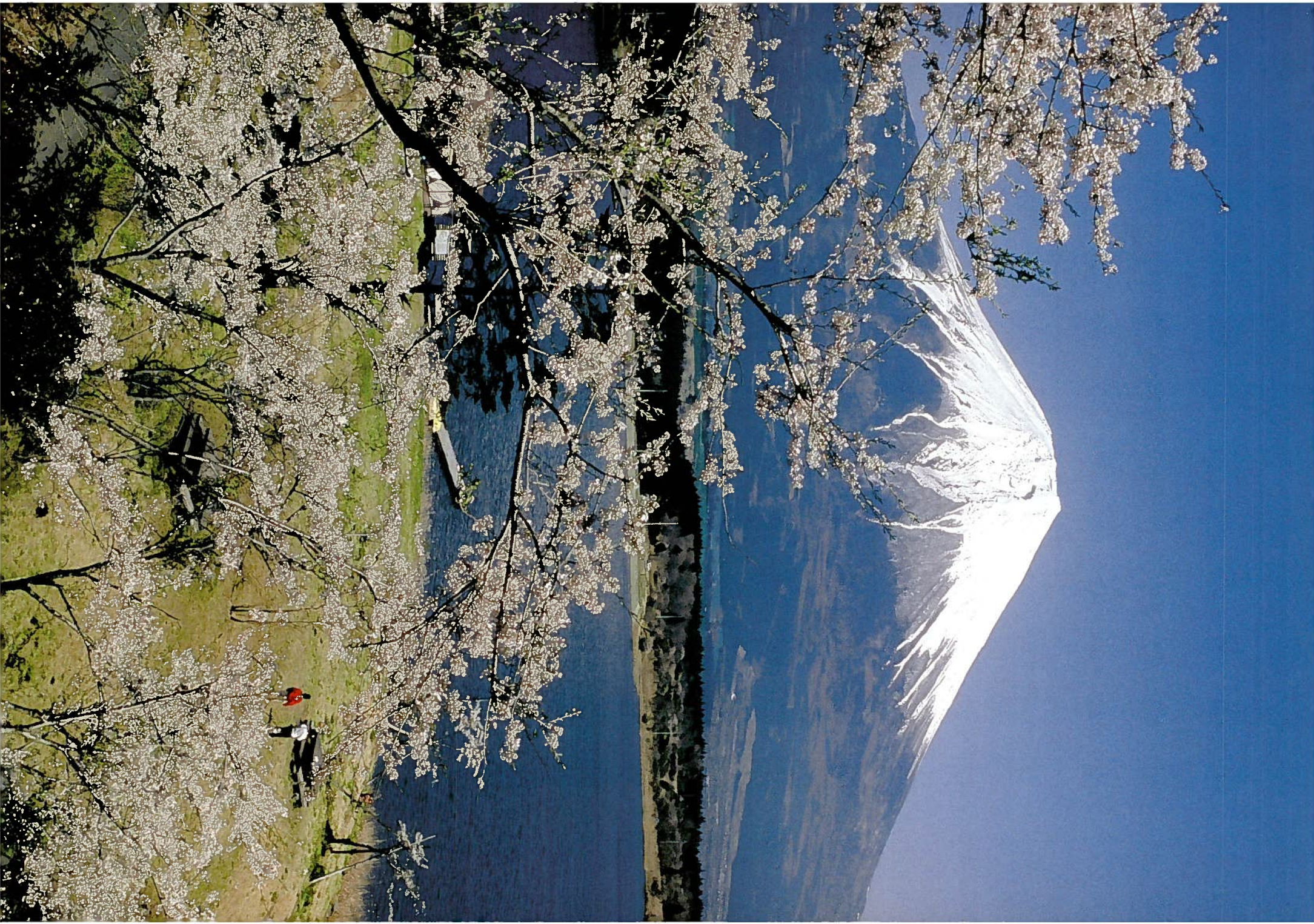
The 4th International Translation Competition 2001-2002, Shizuoka, Japan

제 4회 시즈오카 세계 번역대회 2001-2002, 시즈오카, 일본

応募要項

Guide for Applicants

응모 요령



趣旨

我が国の優れた文学を世界の人々に親しんでもらうとともに、国際相互理解を進めるため、世界各国を対象とした日本文学の翻訳コンクールを開催いたします。

最優秀賞受賞者には、日本に留学していただいて静岡県内の大学などで翻訳の研鑽を積んでいただくとともに日本の文化を学んでいただきます。

Aims

This translation competition is held to encourage the appreciation of Japanese literature around the world and to promote international understanding. The competition is open to entrants from every part of the world.

Recipients of the Grand Prize will be invited to Japan to enhance their translation skills and knowledge of Japanese culture at a university or institute in Shizuoka Prefecture.

취지

우리 나라의 우수한 문학을 세계인들에게 친숙하게 함과 동시에 국제 상호이해를 향상시키기 위해 세계 각국을 대상으로 한 일본문학의 번역콩쿠르를 개최합니다.

최우수상 수상자에게는 일본으로 유학하게 되며 시즈오카현(静岡県)내의 대학 등에서 번역의 깊은 연구를 쌓을 수 있음과 동시에 일본 문화를 배우게 됩니다.

主催: 静岡県、静岡県教育委員会

伊豆文学フェスティバル実行委員会

後援: 外務省、文化庁、国際交流基金、(財)自治体国際化協会

Sponsored and organized by: The Shizuoka Prefectural Government, the Shizuoka Prefectural Board of Education, and the Executive Committee of the Izu Literature Festival Supported by: The Ministry of Foreign Affairs, the Agency for Cultural Affairs, the Japan Foundation, and the Council of Local Authorities for International Relations.

주최: 시즈오카현(静岡県), 시즈오카현(静岡県) 교육위원회

이즈(伊豆) 문학페스티벌 실행위원회

후원: 외무성, 문화청, 국제교류기금, (재) 자치체(自治体) 국제화협회

伊豆文学フェスティバル実行委員会事務局
〒420-8601

静岡県静岡市追手町9番6号
静岡県教育委員会文化課

TEL (054) 221-3109

FAX (054) 250-2784

URL <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail shizuoka@po.sphere.ne.jp

The Secretariat for the Executive Committee of
The Izu Literature Festival

Culture Department, Shizuoka Prefectural Board
of Education 9-6, Ote-machi, Shizuoka-shi,
Shizuoka-ken, 420-8601, Japan

TEL +81-54-221-3109

FAX +81-54-250-2784

URL <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail shizuoka@po.sphere.ne.jp

이즈(伊豆) 문학페스티벌 실행위
원회 사무국

〒420-8601

시즈오카현(静岡県) 시즈오카시(静岡市)

오테마치(追手町) 9번 6호

시즈오카현(静岡県) 교육위원회 문화과

TEL +81-54-221-3109

FAX +81-54-250-2784

URL <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail shizuoka@po.sphere.ne.jp



御挨拶

2001年、新しい世紀の幕開けは、大交流時代の始まりとも地球時代の到来とも言われています。交通手段や通信技術の発達により、人々は容易に異文化に触れ、体験することが可能となり、文字どおり地球がひとつになろうとしています。

こうした時代を迎え、我々にとって重要なことは、魅力ある情報を世界中に発信すると共に、異なる文化や習慣を持つ人々との交流を通じて、互いに理解を深め、世界とのネットワークを築くことではないかと思います。

しかし、異なる文化を相互に理解・尊重し合うためには、乗り越えなければならない言葉というハードルがあります。

そこで、川端康成や井上靖などが優れた作品を数多く生み出した静岡県では、翻訳の果たす役割の重要性に着目し、優れた日本文学を世界に紹介するための翻訳コンクールを開催しております。

本コンクールの企画・運営は、本県出身で詩人として世界的に活躍されている大岡信氏をはじめ、日本を代表する学識豊かな皆様によって行われております。また、審査委員長には、日本文化に大変造詣の深いダナルド・キーン氏に御就任いただいております。

コンクールの最優秀賞受賞者には、県内の大学などへ1年間留学していただき、翻訳を研鑽するとともに、温暖な気候や美しい自然環境と都市機能とを兼ね備えた本県での生活、人々との交流を通して、日本文化を幅広く学んでいただきたいと思います。

これまで、第1回は英語とフランス語、第2回は英語と中国語、第3回は英語とドイツ語を対象として募集を行い、世界各国から多数の御応募をいただきました。また、第3回の審査を終えた諸先生からは、翻訳のレベルが高い、との評価を得ており、本コンクールが翻訳家の登竜門として国内外に広く認められつつある証である、と自負しております。

第4回となる今回は、英語と韓国語を対象にコンクールを開催いたします。

多数の皆様の果敢な挑戦を期待いたします。

2001年9月

静岡県知事
石川嘉延

Invitation from the Governor

The beginning of this new century, as is often noted, marks the arrival of the age of global interaction and communication at the grass-roots level. The sophistication of transportation and telecommunication technologies now allows people to visit and experience different cultures casually, as the world is literally becoming one community.

I believe that what is important as we enter this new age is to network the world with bridges of mutual understanding. To achieve this, we need to know people of different cultural and lifestyle backgrounds, as well as express ourselves to the world in appealing ways.

Understanding and respecting one another's cultures, however, requires overcoming the hurdle of language.

Shizuoka has been the background for many works of Japan's outstanding literary artists, including Kawabata Yasunari and Inoue Yasushi. It is therefore fitting that, recognizing the important role that translation can play, this prefecture hold translation competitions that will introduce Japanese literature to the world.

The planning and management of these competitions are in the hands of Ooka Makoto, a poet of global stature and native of Shizuoka, and other leading figures in Japanese literature. We have also been honored to have Donald Keene, a scholar and translator with a profound understanding of Japanese culture, as head of the panel of judges.

The outstanding entrant working in each target language will be given the opportunity of a year's study, to hone his/her translation skills, at a university or institute in Shizuoka. Living in this prefecture, with its mild climate, magnificent scenery, sophisticated urban facilities, and people so friendly to mingle with, will be an education in Japanese culture itself.

In the first competition we accepted translations into English and French, for the second, English and Chinese, and for the third, English and German. Each time, we received numerous entries from around the world. The quality of translations in the third competition was commended particularly highly by all the judges. This should be proof that this competition is developing, as we are proud to claim, into a prestigious and authoritative international gateway to recognition as a translator.

The forthcoming is the forth competition, with translations into English and Korean.

We look forward to meeting many talented and determined entrants.

September 2001

Governor of Shizuoka Prefecture

Ishikawa Yoshinobu

인사말

2001년, 새로운 세기의 개막은 대교류시대의 시작이며 지구시대의 도래라고들 하고 있습니다. 교통수단이나 통신기술의 발달에 의해 사람들은 쉽게 다른 문화를 접하고 체험하는 것이 가능해져 문자대로 지구가 하나가 되려고 하고 있습니다.

이러한 시대를 맞이하여 우리들에게 있어서 중요한 것은 매력있는 정보를 온 세계에 발신함과 동시에 다른 문화와 습관을 가진 사람들과의 교류를 통하여 서로 이해를 깊게 하고 세계와의 네트워크를 구축하는 것이 아닐까하고 생각합니다.

그러나 다른 문화를 서로 이해·서로 존중하기 위해서는 넘어야만 하는 언어라는 허들이 있습니다.

그래서 가와바타 야스나리(川端康成)나 이노우에 야스시(井上靖) 등이 우수한 작품을 수많은 시즈오카현(静岡県)에서는 번역이 수행하는 역할의 중요성에 착목하여 우수한 일본문학을 세계에 소개하기 위한 번역콩쿠르를 개최하고 있습니다.

본 콩쿠르의 기획·운영은 본현 출신이며 시인으로서 세계적으로 활약하고 계시는 오오카 마코토(大岡信) 씨를 비롯하여 일본을 대표하는 학식이 풍부한 여러분에 의해 행해지고 있습니다. 또한 심사위원장으로는 일본 문화에 대단히 조예가 깊은 도널드 키인(Donald Keene) 씨가 취임하고 계십니다.

콩쿠르의 최우수상 수상자에게는 현내의 대학 등에서 1년간 유학하여 번역의 깊은 연구를 함과 동시에 온난한 기후, 아름다운 자연환경과 도시기능 등을 겸비한 본현에서의 생활, 사람들과의 교류를 통하여 일본문화를 폭 넓게 배워 주시기를 바라는 생각입니다.

지금까지 제 1회는 영어와 프랑스어, 제 2회는 영어와 중국어, 제 3회는 영어와 독일어를 대상으로 모집을 하여 세계 각국으로부터 다수의 응모를 받았습니다. 또한 제 3회의 심사를 끝낸 여러 선생님께로부터는 번역의 레벨이 높다는 평가를 얻었고 본 콩쿠르가 번역가의 등용문으로서 국내외에서 널리 인정받고 있다는 증거라고 자부하고 있습니다.

제 4 회가 되는 금회는 영어와 한국어를 대상으로 콩쿠르를 개최합니다.

많은 여러분의 과감한 도전을 기대하겠습니다.

2001년 9월

시즈오카현(静岡県)지사
이시가와 요시노부
(石川嘉延)



大岡 信

詩人、日本芸術院会員

Ōoka Makoto

Poet, member of the Japan Art Academy

오오카 마코토 (大岡信)

시인, 일본예술원 회원

静岡県教育委員会からこのコンクールについて初めて相談を受けた時、私は正直なところびっくりしました。こんなことを考えつくこと自体、現代日本ではまさに夢物語だろうと思ったからです。しかし静岡県は真剣でした。それなら、世界の人々に対して開かれた、質量ともにどこへ持ち出しても恥ずかしくないコンクールにしようと念願して、現在のような案が成立しました。審査委員長に就任して下さった دونالد・キーン氏は、私が概略の説明をした瞬間、文字通り嘆声を発して、「すばらしい」と絶句されました。企画委員の諸氏も全員即座に賛同、委員を引き受けられました。これが世界のどのような俊秀を見出し、船出させることになるのか、夢は大きくふくらみます。広い世界が相手の企画です。あせらず、着々と、未来をしっかりと手ぐり寄せることに、力を注ぎたいと思います。

(第3回作品審査の選評より)

…世界各地から、易しいとはとても言えない種類の日本語の長文の文章と真剣に取り組み、翻訳し、応募してくる人々が、二つの言語(今回はドイツ語と英語)あわせて約百五十人もいたということは、驚くべきことだと、声を大にして言いたい。この喜ばしい傾向をさらに積極的に押し進めたいと思う。(中略)

…言葉というものは、それと格闘すればするほど、ますます面白みが深まる、数少ない人間の持ちものの一つである。このコンクールで優秀な成績を取めた人々はみな、その魅力にとりつかれて努力を重ねた人々である。また、残念ながら選に洩れてしまった多くの人々も、その点ではまったく同じはずで、私はこの人々全員に深い敬意と賞賛を捧げたい。……

翻訳コンクール企画委員長 大岡 信

翻訳コンクール企画委員

Planning Committee for the Shizuoka International Translation Competition

번역콩쿠르 기획위원



粟津則雄

文芸評論家、フランス文学者

Awazu Norio

Literature critic, scholar of French literature

아와즈 노리오 (粟津則雄)

문예평론가, 프랑스문학자



川村二郎

文芸評論家、ドイツ文学者

Kawamura Jirō

Literature critic, scholar of German literature

가와무라 지로 (川村二郎)

문예평론가, 독일문학자



高橋英夫

文芸評論家、ドイツ文学者、日本芸術院会員

Takahashi Hideo

Literature critic, scholar of German literature, member of the Japan Art Academy

다카하시 히데오 (高橋英夫)

문예평론가, 독일문학자, 일본예술원회원



向井 敏

文芸評論家、エッセイスト

Mukai Satoshi

Literature critic, essayist

무카이 사토시 (向井敏)

문예평론가, 수필가



山崎正和

劇作家、文芸評論家、東亜大学学長

Yamazaki Masakazu

Playwright, literature critic, President of the University of East Asia

야마자키 마사카즈 (山崎正和)

극작가, 문예평론가, 도아 (東亜) 대학학장



ドナルド キーン

コロンビア大学名誉教授

Donald Keene

Professor Emeritus, Columbia University

도널드 키인 (Donald Keene)

컬럼비아대학 명예교수

日本文学を海外で知って貰いたいという声が絶えません。或いは、訳者たちの選んだ作品は古典的であって現代の日本文学を充分反映しないという非難があります。これらの文句に充分意味がありますが、日本文学の若い訳者を育てることがどんなにむずかしいか斟酌していないように思われます。

外国人として日本語を覚えることは実にむずかしいです。一応、新聞を読めるようになって文学をなかなか理解できないことが多いです。

また、文学の翻訳がやりたい人は大学の教師なら、翻訳の業績によって昇格することは先ずないと諦めて、論文を書くことがよくあります。しかも、仮に翻訳が本になっても収入が芳しくないことは覚悟しなければなりません。それにもかかわらず日本文学の翻訳を是非やりたいという人がいますので、このコンクールは最高にありがたいものです。若い翻訳家に何よりの刺激を与えて、翻訳という、人間に不可欠な仕事の重要性和有り難さを教えるでしょう。

(第3回作品審査の選評より)

三回目のしずおか世界翻訳コンクールの英語部門に応募した人たちの多くは、日本で生活したことがあるためか、教科書から覚えられない日本語のニュアンスに敏感であり、表現の細かい部分を上手に英語で伝えられたことに感心した。日本語をどんなによく理解できても、英語の表現力が足りない場合、優れた翻訳ができないことは言うまでもないが、応募者の多くは、実に良い英語をこなしていて、原作の文章の特徴を上手に訳することができた。

翻訳コンクール審査委員長 ドナルド キーン

翻訳コンクール審査委員

Judges' Committee for the Shizuoka International Translation Competition

번역콩쿠르 심사위원

■英語部門 Judges of English translations 영어부문



大岡 信

詩人、日本芸術院会員

Ōoka Makoto

Poet, member of the Japan Art Academy

오오카 마코토 (大岡信)

시인, 일본예술원 회원



ジャニーン バイチマン

大東文化大学教授

Janine Beichman

Professor of Daito Bunka University

재닌 베크맨 (Janine Beichman)

다이토분카 (大東文化) 대학교수

■韓国語部門 Judges of Korean translations 한국어부문



吳 英珍

東国大学教授

Oh Young Jin

Professor of Dongguk University

오 영 진 (吳英珍)

동국대학교 교수



水野俊平

全南大学講師

Mizuno Shunpei

Lecturer at Chonnam National University

미즈노 쉐페이 (水野俊平)

전남대학교 강사

応募手続

1. 資格

国籍、年齢は問いません。ただし、次の人は対象から除きます。

- かつて翻訳書を出版したことのある人
- 共訳(2人以上で翻訳した場合)

2. 応募方法

所定の応募用紙に必要事項を記入のうえ、翻訳原稿と身分を証明する書類を添えて事務局までお申し込みください。

原稿用紙のサイズはA4、縦長、横書、35行、左右1.5cm以上の余白をとってください。
なお、作品の返却はいたしません。

3. 応募規定

●翻訳課題図書

次の小説(短篇)3篇と評論3篇から、それぞれ1篇ずつを選択する。

●小説

図書名	著 者	出 典
「望潮」	村田喜代子	『望潮』(文藝春秋)
「溺れる」	川上 弘美	『溺れる』(文藝春秋)
「眼下のゲーム」	海老沢泰久	『スーパー・スター』(文藝春秋)

●評論

図書名	著 者	出 典
「花柳小説論ノート」	丸谷 オー	『星めがね』(集英社)
「ジャーナリズム」	林 達夫	『林達夫著作集6』(平凡社)
「美しい言葉とは」	茨木のり子	『言の葉さやげ』(花神社)

●翻訳言語

英語又は韓国語(どちらか一言語を選択する)

※翻訳作品に「注」を設けることは任意とする。

4. 応募期間

2002年12月16日までに下記応募先に到着したものを有効といたします。

5. 応募先・問い合わせ先

伊豆文学フェスティバル実行委員会事務局

〒420-8601 静岡県静岡市追手町9番6号 静岡県教育委員会文化課

TEL (054) 221-3109 FAX (054) 250-2784

URL <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

Eメール shizuoka@po.sphere.ne.jp

〈賞・表彰式〉

1. 賞(翻訳言語ごとに)

- 最優秀賞／各1名 表彰状、賞金100万円、日本留学助成金(1年間)
- 優 秀 賞／各2名 表彰状、賞金30万円
- 奨 励 賞／各2名 表彰状、賞金10万円

(1) 各言語の最優秀受賞者には、静岡県内の大学などへ1年間留学してもらうため、日本留学助成金が与えられます。ただし、本コンクールの終了後1年以内に留学できる方に限ります。

(2) 上記の賞金から日本の税法に基づく税金が差し引かれます。

2. 通知

入賞者には審査終了後、結果を通知いたします。

3. 表彰式

(1) 表彰式は2003年秋に静岡県内において開催し、各言語の最優秀賞及び優秀賞の受賞者を招待いたします。

(2) 招待される受賞者は、パスポート、ビザ等を御自身で手配してください。

〈その他〉

1. 主催者はコンクールの円滑な運営を図るため、応募要項の発表後も条項の追加、削除、変更する権利を保有します。
2. 応募要項に明記されていない事項で問題が生じる場合は、主催者の決定に従っていただきます。
3. 本コンクール入賞作品の頒布に関する権利は、本コンクール主催者及び原作者著作権者に帰属します。
4. コンクールの応募規定、または運営上に起こった訴訟に関しては、日本国の法律に従って裁定されます。
5. 本要項は、英語、韓国語及び日本語で併刷しますが、翻訳による意味の相違がある場合は日本語版を優先します。

Application Procedures

1. Who May Apply

Applications from persons of all nationalities and ages are welcome, with the following exceptions:

- Persons who have had a translation published may not apply.
- Joint translations (works translated by two or more persons) may not be entered.

2. How to Apply

Fill out the application form and send it, with your translations, to the secretariat at the address below. Document(s) confirming your identity should accompany your submission.

Translation must be typed on 8 1/2 × 11-inch or A4 size paper, 35 lines per page, with 1.5 cm (2/3 inch) margins at both sides.

Translations will not be returned.

3. Translations

Set Pieces

Applicants must choose one work in each category (fiction and literary criticism) from the list below.

Fiction (short stories)

<i>Bōchō</i> , by Murata Kiyoko (<i>Bōchō</i> , Bungei Shunjū)
<i>Oboreru</i> , by Kawakami Hiromi (<i>Oboreru</i> , Bungei Shunjū)
<i>Ganka no Gēmu</i> , by Ebisawa Yasuhisa (<i>Sūpā Sutā</i> , Bungei Shunjū)

Criticism

<i>Karyū Shōsetsuron Nōto</i> , by Maruya Saiichi (<i>Hoshimegane</i> , Shūeisha)
<i>Jānarizumu</i> , by Hayashi Tatsuo (<i>Hayashi Tatsuo Chosakushū Vol. 6</i> , Heibonsha)
<i>Utsukushii Kotoba towa</i> , by Ibaragi Noriko (<i>Kotono Ha Sayage</i> , Kashinsha)

Target Language

Select either English or Korean.

Note : You may include comments regarding the translation if you like.

4. Deadline

All translations must be received by the secretariat at the address below by December 16, 2002.

5. Address and Contact

The Secretariat for the Executive Committee of the Izu Literature Festival

Culture Department, Shizuoka Prefectural Board of Education

9-6, Ōte-machi, Shizuoka-shi, Shizuoka-ken, 420-8601, Japan

Phone: +81-54-221-3109

Fax: +81-54-250-2784

Web: <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail: shizuoka@po.sphere.ne.jp

Awards and Awards Ceremony

1. Awards

There will be two sets of awards, for translation into English and into Korean.

Grand Prize

A certificate, a ¥1,000,000 prize and a grant to study in Japan for one year (one winner for each target language)

Distinguished Translation Award

A certificate and a ¥300,000 prize (two winners for each target language)

Distinctive Merit Award

A certificate and a ¥100,000 prize (two winners for each target language)

The recipients of the Grand Prize will be offered grants to study in Japan for one year at a university or institute within Shizuoka Prefecture. The recipients must be able to take up their grants and come to Japan to study within one year of receiving their awards.

The relevant taxes as determined under Japanese tax laws will be deducted from the prize money.

2. Notification

Award winners will be notified of the results after judging is completed.

3. Awards Ceremony

The recipients of the Grand Prize and Distinguished Translation Award both in the English and Korean division will be invited to attend the Awards Ceremony, which will be held in fall of 2003 in Shizuoka Prefecture.

Those invited to attend will be responsible for arranging their own passports and visas.

Other points

1. To ensure smooth implementation of the competition, the organizers retain the right to add, delete, or change clauses in the guide for applicants.
2. Any problems that arise regarding points not clearly stated in the guide for applicants will be left to the discretion of the organizers.
3. Distribution rights to winning translations revert to the organizers of the competition and the original copyright holders.
4. Any litigation arising during the implementation of the competition or regarding the competition rules is to be ruled upon according to Japanese law.
5. This guide is provided with English and Korean translations as well as the Japanese original. The Japanese version takes precedence over the English or Korean if differences in meaning arise from the translation.

응모절차

1. 자격

국적, 연령 불문. 단, 다음의 자는 대상에서 제외합니다.

- 과거 번역서를 출판한 적이 있는 자
- 공역 (2인이상이 번역한 경우)

2. 응모방법

소정의 응모용지에 필요사항을 기입한 후, 번역원고와 신분을 증명하는 서류를 첨부하여 사무국으로 신청해 주십시오.

원고용지의 크기는 A4, 세로크기, 가로쓰기, 35행, 좌우 1.5cm 이상의 여백으로 해 주십시오.

또한, 작품의 반환은 하지 않습니다.

3. 응모규정

● 번역과제도서

다음의 소설 (단편) 3편과 평론 3편에서 각각 1편씩을 선택한다.

● 소설

도서명	저 자	출 전
「보초」 「望潮」	무라타 키요코 (村田喜代子)	『보초』 (문예춘추) 『望潮』 (文藝春秋)
「오보레루」 「溺れる」	가와카미 히로미 (川上弘美)	『오보레루』 (문예춘추) 『溺れる』 (文藝春秋)
「간카노게임」 「眼下のゲーム」	에비사와 야스히사 (海老沢泰久)	『슈퍼스타』 (문예춘추) 『スーパー・スター』 (文藝春秋)

● 평론

도서명	저 자	
「화류소설론 노트」 「花柳小説論ノート」	마루야 사이이치 (丸谷才一)	『호시메가네』 (집영사) 『星めがね』 (集英社)
「저널리즘」 「ジャーナリズム」	하야시 다쓰오 (林達夫)	『하야시 다쓰오 저작집 6』 (평범사) 『林達夫著作集 6』 (平凡社)
「아름다운 말이란」 「美しい言葉とは」	이바라기 노리코 (茨木のり子)	『고토노하사야게』 (화신사) 『言の葉さやげ』 (花神社)

● 번역언어

영어 또는 한국어 (어느 쪽이든 한 언어를 선택한다)

※ 번역작품에 「주」를 다는 것은 임의로 한다.

4. 응모기간

2002년 12월 16일까지로 하기 응모처에 도착한 것을 유효로 합니다.

5. 응모처 · 문의처

이즈 (伊豆) 문학페스티벌 실행위원회 사무국

〒420-8601 시즈오카현 시즈오카시 오테마치 9번 6호 시즈오카현 교육위원회 문화과
(静岡県静岡市追手町9番6号 静岡県教育委員会文化課)

TEL +81-54-221-3109 FAX +81-54-250-2784

URL <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka>

E-mail shizuoka@po.sphere.ne.jp

〈상 · 표창식〉

1. 상 (번역언어마다)

- 최우수상 / 각 1명 표창장, 상금 100 만엔, 일본유학조성금 (1년간)
- 우수상 / 각 2명 표창장, 상금 30 만엔
- 장려상 / 각 2명 표창장, 상금 10 만엔

(1) 각 언어의 최우수 수상자에게는 시즈오카현 (静岡県) 내의 대학 등에서 1년간 유학하기 때문에 일본유학조성금이 주어집니다. 단, 본 콩쿠르의 종료후 1년 이내에 유학할 수 있는 분에 한합니다.

(2) 상기의 상금에서 일본 세법에 의거하는 세금이 공제됩니다.

2. 통지

입상자에게는 심사종료후, 결과를 통지합니다.

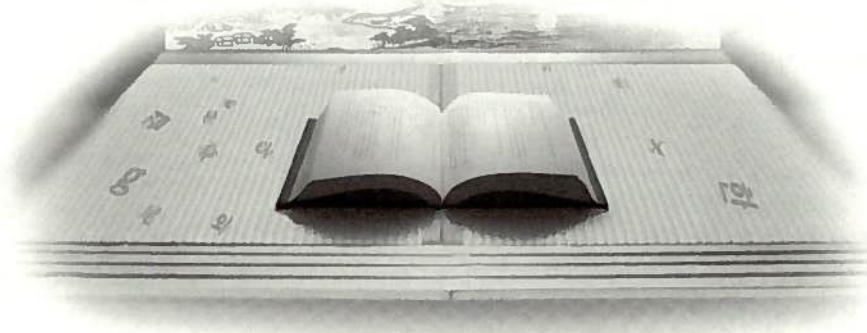
3. 표창식

(1) 표창식은 2003년 가을에 시즈오카현 (静岡県) 내에서 개최하고 각 언어의 최우수상 및 우수상의 수상자를 초대합니다.

(2) 초대된 수상자는 여권, 비자 등을 본인이 준비하여 주십시오.

〈기타〉

1. 주최자는 콩쿠르의 원활한 운영을 도모하기 위해 응모요령 발표후에도 조항의 추가, 삭제, 변경할 권리를 보유합니다.
2. 응모요항에 명기되어 있지 않은 사항에서 문제가 발생한 경우는 주최자의 결정에 따릅니다.
3. 본 콩쿠르 입상작품의 발표에 관한 권리는 본 콩쿠르 주최자 및 원작 저작권자에 귀속합니다.
4. 콩쿠르의 응모규정, 또는 운영상에 생긴 소송에 관해서는 일본국의 법률에 따라 결정됩니다.
5. 본 요항은 영어, 한국어 및 일본어로 각각 인쇄합니다만 번역에 의한 의미가 서로 다른 경우는 일본어판을 우선합니다.



The 4th Shizuoka International Translation Competition

第4回しずおか世界翻訳コンクール
応募用紙

The 4th Shizuoka International Translation Competition
Application Form

No. *	氏(漢字) / Surname	名(漢字) / Given Name & Middle Initial	写真 正面・上半身 (4cm×5cm) Photo Front/Head and Upper Torso 4cm×5cm(1 2/3"×2")
	カタカナ読み / In katakana		
生年月日(西暦) / Date of Birth		(歳) / Age	
翻訳課題図書名(小説) Text Translated (Fiction)		翻訳課題図書名(評論) Text Translated (Criticism)	翻訳言語 Target Language
国籍 / Nationality			
現住所 / Current Address		Telephone:	Fax:
連絡先 / Contact Address (if different from Current Address)		Telephone:	Fax:
E-mailアドレス E-mail Address			
社会人の場合 If you are employed	勤務先・職務内容等 / Write your employer's name and address.		
学生の場合 If you are a student	学校名・学部学科等 / Write the name of your school, your major and field of concentration.		
最終学歴(学校、学部、学科、学位名等を記す) / Highest Educational Qualification (Please specify the name of the institution, your degree and major.)			
翻訳歴 / Translation Background			
私は、当コンクールの規定に同意し、その適用に応じます。 I agree to abide by the rules of this competition.			
署名 Signature			

●*印は記入しないこと。

* Do not write in this space.

●翻訳原稿(小説、評論)及び身分を証明する書類(学生証、社員証等の写し)を添付して、事務局まで送付する。

To enter the competition, send this application with your translations and document(s) confirming your identity (such as copy of your student or employment ID) to the secretariat.

Home of Mt. Fuji Shizuoka Prefecture 静岡

日本のシンボル・富士山を間近にひかえる静岡県は、大きく飛翔し続けている。
豊かな自然と高度な工業技術、香り高い文化と夢のある暮らし。静岡県は日本の未来を担う。

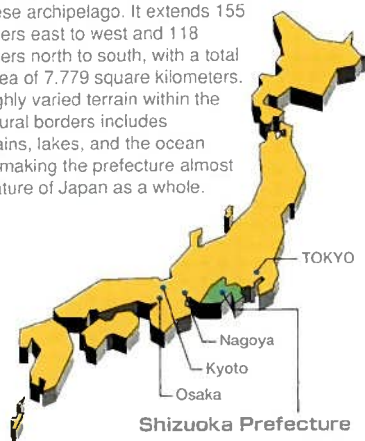
Under the soaring presence of Mt. Fuji, Japan's most famous symbol,
vital Shizuoka Prefecture is growing and changing.
With a magnificent natural setting, cultural riches, and sophisticated technologies,
Shizuoka is leading Japan's drive into the future.

位置

静岡県は日本のほぼ中央、太平洋に面した位置にあります。東西155km、南北118km、面積7,779km²の県土は、海、山、湖などバラエティに富んだ自然に恵まれ、日本の縮図ともいえる風土を有しています。

Location

Shizuoka Prefecture is located on Pacific shore of Japan, roughly in the middle of the Japanese archipelago. It extends 155 kilometers east to west and 118 kilometers north to south, with a total land area of 7,779 square kilometers. The highly varied terrain within the prefectural borders includes mountains, lakes, and the ocean shore, making the prefecture almost a miniature of Japan as a whole.



地形

東西に長い静岡県は、遠州灘、駿河湾、相模湾に面した、約506kmの長い海岸線と富士山や南アルプスなど3,000m級の山々の連なる北部山岳地帯に囲まれています。また、富士川、大井川、天竜川などの川が県土を南北に縦断しています。

Topography

Shizuoka has 506 kilometers of coastline, including the Sea of Enshu and Suruga and Sagami bays. The mountains to the north are a chain of peaks topping 3,000 meters, including Mt. Fuji and the Southern Alps. The Fuji, Oi, Tenryu, and other rivers traverse the prefecture from north to south.



裾野市からの富士山
A view of Mt. Fuji from Susono city

気候

静岡市（県庁所在地）の年平均気温は16.2℃（1999年）、年降水量は2152mm（1999年）です。北部山岳地帯を除けば、全般に温暖な海洋性気候で、春は温暖、夏の前半が雨期、後半は晴天で高温、秋は涼風・快晴、冬は乾燥・晴天と四季のはっきりした気候です。

Climate

Shizuoka enjoys an average temperature of 16.2℃ (1999 data) and average annual rainfall of 2152mm (1999). A temperate oceanic climate prevails throughout the prefecture except in its northern mountains.

Seasonal changes in Shizuoka are marked. A mild spring is followed by a rainy season at the beginning of summer. Blue skies and high temperatures characterize mid-summer, and autumn brings cool breezes and clear skies. Fine, dry weather continues throughout the winter.



春の訪れ、桜と富士山
Cherry blossoms and Mt. Fuji, a symbol of spring in Japan

交通

静岡県は、日本のほぼ中央に位置し、首都東京からは、東海道新幹線を利用して約1時間と近く、東名高速道路などの幹線道路も整備されています。また、静岡県では、2006年春の開港をめざし「静岡空港」の建設工事を進めています。国際機能を備えた地方拠点空港として、多くの県民からその誕生が待たれています。



東西を結ぶ高速列車東海道新幹線
Tokaido Shinkansen

Access

Shizuoka's central location makes it a quick one-hour journey from Tokyo, the nation's capital, on the Tokaido Shinkansen (Bullet Train). The Tomei Expressway and other major highways also run through the prefecture. Shizuoka is also moving ahead on the construction of Shizuoka Airport, slated to open in the spring of 2006. Eagerly awaited by many Shizuoka residents, the new regional hub airport will also provide international services.



静岡空港の完成予想図(合成写真)
Artist's conception of Shizuoka Airport

歴史

東西文化圏の交差する地でもあったことから、古くから文化の花が咲きました。特に、近世において、江戸幕府を開いた将軍徳川家康が現在の静岡市に居城を置いたことから、政治や経済の中心地として繁栄しました。



遠く平安時代から駿河国の総社として栄えてきた静岡浅間神社。
Shizuoka Sengen Shrine has prospered since the Heian period as the main shrine for Suruga Province (present-day central Shizuoka)

History

Shizuoka is a cultural crossroads where the east and west of Japan meet, and it is little wonder that culture has long flourished in Shizuoka. It has prospered as a political and economic center since late medieval times, particularly since Tokugawa Ieyasu, the first Tokugawa Shogun, chose in 1586 to build his residential castle, Sumpu Castle, in what is now city of Shizuoka.



将軍・徳川家康が築いた駿府城、そのおかげを残す櫓。
Sumpu Castle was built under the command of Tokugawa Ieyasu; its surviving turret at the southeast corner suggests its former glory

産業

静岡県は日本でも有数の工業の発達した県です。県東部では、工作機械、電気機器、合成繊維、医薬品が有名で、富士山の裾野に立地する紙・パルプ生産は日本一です。県中部では缶詰・水産加工品、家具、プラスチック玩具などが生産されています。県西部では、ピアノをはじめとする楽器類、オートバイ、繊維などが世界有数の生産量を誇っています。

農林水産業の分野では、日本一のお茶をはじめ、みかん、野菜がつくられ、森林を利用したきのこ類の栽培も盛んです。また、遠洋漁業をはじめ水産加工も活発です。



日本平のお茶畑から望む富士山と駿河湾
The tea plantations of Nihondaira offer this view of Mt. Fuji and Suruga Bay

Industry

Shizuoka is the birthplace of many of Japan's leading industries. Eastern Shizuoka is renowned for production of machine tools, electrical equipment, synthetic fibers, and pharmaceuticals. The region at the foot of Mt. Fuji leads Japan in paper and pulp production. Central Shizuoka produces canned and processed marine products, furniture, and plastic toys; western Shizuoka is one of the world's largest producers of pianos and other musical instruments, motorcycles, and textiles. The farmers of Shizuoka grow vegetables, *mikan* (tangerines), and Japan's best green tea. The prefecture's forests are also used in the cultivation of mushrooms, a thriving business. Shizuoka's oceanic fishing fleet and seafood processing industries are also vigorous.

国際オペラコンクール in SHIZUOKA

「国際オペラコンクール in SHIZUOKA」は、本県ゆかりのプリマドンナ三浦環をたたえ、没後50年にあたる1996年から、3年ごとに開催しています。

このコンクールは、音楽界における有能な人材を発掘することほもとより、広く音楽文化の発展を願うとともに、国際交流を通して内外との連携を深め、世界に広がる「しずおか文化」を創造することを目的としています。

第3回コンクールは、2002年11月2日～10日、アクティシティ浜松大ホールで行われます。

The 3rd International Opera Competition in SHIZUOKA

The International Opera Competition in SHIZUOKA was established in honor of the prima donna MIURA Tamaki, known for her ties to Shizuoka Prefecture. Beginning in 1996, the fiftieth anniversary of Ms. Tamaki's death, the competition is held once every three years.

The aim of this competition is to deepen our connection with other regions in Japan and with other countries through international interaction and the showcasing of the culture of Shizuoka for worldwide attention, aiming for the broad development of music culture and, of course, hoping to find promising young talent in the world of vocal music.

- DATES : November 2—November 10, 2002
- LOCATION : Main Hall, ACT City Hamamatsu
(Hamamatsu-shi, Shizuoka-ken, Japan)
- THE 1ST PRIZEWINNER : ¥3,000,000 (in Japanese yen)
- APPLICATION DEADLINE : May 31, 2002
- FOR FURTHER INFORMATION AND TO REQUEST GUIDE FOR APPLICANTS : Fax : 81-54-250-2784

E-mail : shizuoka@po.sphere.ne.jp

Web Page : <http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka/>



2002 FIFAワールドカップ™ 静岡開催

世界最高峰のスポーツの祭典「FIFAワールドカップ™」が、2002年6月に静岡スタジアムエコパで開催されます。ワールドカップの開催は、県民に夢と感動を与えることはもとより、静岡を世界に情報発信する絶好の機会でもあります。静岡スタジアムエコパの完成をはじめ、受入体制の整備など開催準備が着々と進められています。

2002 FIFA World Cup™ in SHIZUOKA

The FIFA World Cup™, one of the most popular sporting events in the world, will be held at Shizuoka Stadium Ecopa in June, 2002. It not only brings joy to local residents but it is also a good opportunity to disseminate information about Shizuoka to the world. Numerous projects for the opening of the World Cup are now on the go, including completion of Shizuoka Stadium Ecopa and preparing to host the players, guests and spectators.



しずおか国際園芸博覧会『パシフィックフローラ2004』

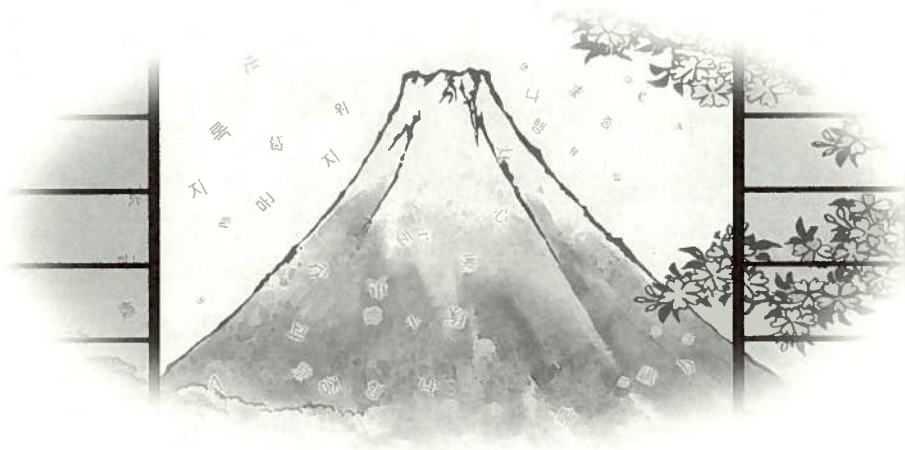
静岡県は日本でも有数の花の産地です。2004年には、静岡県西部の美しい浜名湖を会場に、多くの国々の参加を得て、国際的な花と緑の博覧会が開催されます。「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」をテーマに美しい花々が咲きそろう56haの会場には、2004年の4月8日から10月11日までの187日間に500万人が国内外から集います。

Pacific Flora 2004 International Floral Exposition in Shizuoka

Shizuoka is one of Japan's largest growers of flowers. The scenic lake Hamana-ko, in the western part of the prefecture, will become the background for an international floral and greenery exposition in 2004, as the exhibitors assemble from the world over. The theme that will guide this exposition is "Create a New Living Environment Surrounded by Flowers, Greenery, and Waters."

The 138-acre venue will remain filled with a rich and magnificent variety of blossoms between April 8 and October 11 of 2004. A total of five million visitors are expected during the 187-day period.





The 4th Shizuoka International Translation Competition

あこがれるのも、地方にはまだ人間のことばが残っていそうに思われ、ことばの平常心、ことばの健やかさが何気なく匂っているに思われて、それに触れたいという無意識の願望も隠れているのではないだろうか。

言葉は耳のまわりを、目の前を飛びかい、なんとか人の心に痕跡を残したいと騒ぐが、受けとり手はただただ馬耳東風にきき流してしまっている。人の話すことに好奇心なり関心なりを動かさなくなるとき、それが老化現象の第一歩だと思いが、社会現象としての老化徴候は言葉だけから見ても深く静かに進んでいて、既に老人のような若者もいっばいだ。

かくいう私自身も、大事なことくだらぬことひつくるめて、もう沢山、聴く耳もたぬという態度になっていることがかなり多くて、その怠惰さにハッとなることがある。こうしたことが習い性となると、たぶん自分の発する言葉もきわめて安易な出かたをするようになるだろう。それもまた人々によって馬耳東風にきき流されてゆくだろう。

「言霊の幸^{さい}ふ国」などと勝手にきめてきたわけだが、それにしてもこうしたためったやたらな溢れかえりを指したものでなかった筈である。一人の人間のなかに長い間あたためられ、十分に蓄電されて、何かが静かに身を起し、ぽっと燈りのつくような、言葉が幸^{さい}そのものを呼びよせてしまうような、あるいはまた鋭い電流が一瞬に走り出すような、言語機能の不可思議さ、不可知さを

言霊と名づけたものだろうが、この魅力ある霊^{たま}の所在を示すような言葉に、なかなか行きあえないことをひしひしと感じる。

またしても暗くなつたが、やむをえない。「言葉の不在」は、まっすぐに「人間不在」につながるもので、考えてみるとひどくおそろしいことである。

けれど毎日毎日を、そらおそろしやと思つて暮しているわけではけつしてない。ある日、ある時、美しい言葉に出会った瞬間、愕然とそのことに気づかされるのである。

私もこの実写記録を見た。子供を抱え、あるいは一人で、何人もの女たちが崖から海へ棒のように落下した。望遠レンズを使つて写したらしいそれは、白昼夢のように滑稽で、たよりなげで、異様でもあった。「あれは私だ!」という痛覚もあった。あの日そこに居たなら自分も間違いなく飛びこんでいた筈だから。ただ私はこの体験をうまく組み立てられなかったから尚のこと「崖」という詩に感動するのである。

この詩を読むと、体験の組織化だけではなしに、「発見」「表現の正確さ」をも兼ねそなえていることがわかる。この詩に限らず私のはたと立止ってしまった美しい言葉たちは、おおむねこの三つくらいの要素が重なりあっている場合が多い。

ふつう一般の日常会話もそうだが、また、文学作品についても当てはまることだろうと思う。すくなくとも私はそうである。発見のない、表現の不正確な、体験の組織化の果されていない作品は読むに耐えない。

以上、言葉を生む母胎のようなものばかりに触れてきたが、実際、私は人の話を聴く場合、現れた言葉の形、形式には殆んどこだわらない。こだわらなすぎて困るぐらいである。もう少し、こだわらるべきかと思っている。文法におかしいことや、自分の行為にうつかり敬語をくつつけてしまっているのよりも（避けられればそれにこしたことはないが）むしろ内容の方がはるかに気

にかかるのである。乱れていようが、珍妙であろうが「ああ、久しぶりに人間の言葉を聴いた」という、一種のよろこびを呼びさましてくれるものを、私は美しい言葉だと思っている。

それは傑出した人の傑出した言葉とのみは限らない。新聞の投書欄のなかに、行きずりの人のことばのきれはしに、友人とのだべりや批判のなかからも得ることはできる。

ただ年々、それらは乏しくなってきたような気がしてならない。人々はあまりに忙しすぎるのだ。

毎日誰かしらと話している。

毎日何かしらを讀んでいる。

毎日なんだかんだの日本語を聴いている。

言葉の渦であり、言葉の氾濫、洪水であり、日本語の賑やかなこと驚くべきものだが、その実おそろしく、一人の人間の鮮烈な言葉にゆきあたらない、ということなのだ。

打合せのための事務的な言葉、利害を分ちあうための暗号、記号、符牒のようなものとはとびかう。政治家の煮たか焼いたかわからないような言語料理法、コマーシャルの白髪三千丈的な大袈裟さ。いまはやりの「接触する」「……という感触があった」などが示しているように昆虫の触角のふれあいのような、また小当りに当たってみるといふ痴漢を連想させるような妙ないまわし。こんな言葉のなかからは、もはや人間の交流など望みうべくもない。

都会地でそれらは一層はげしいが、都会の人々がやたらに旅に

美徳やら義理やら体裁やら

何やら。

火だの男だのに追いつめられて。

とばなければならぬからとびこんだ。

ゆき場のないゆき場所。

(崖はいつも女をまっさかさまにする)

それがねえ

まだ一人も海にとどかないのだ。

十五年もたつというのに

どうしたんだろう。

あの、

女。

この詩は一九六八年刊、石垣りん詩集『表札など』に収められている。この詩を読みつつ最終連に至ったとき、私の眼はそこに釘づけになった。衝撃を受けつつ、何度もくりかえし読んだ。第二次大戦をテーマとした詩は多いが「崖」はたぶん、もっともすぐれたものの一つになるだろう。

辞書をひかなければわからないという言葉はなく、詩的修飾も

まるつきり施されてはいないのだが、しかし、きわめて難解な詩だともいえよう。

最終連の、物体としての女は確かに海へ落ちたのだが、実体としての女は落ちず、行方不明なのだということがわからなければ……。私の考えによれば、行方不明の女の霊は、戦後の私たちの暮しのなかに、心のなかに、実に曖昧に紛れ込んだのだ。うまく死ねなかったのである。自分の死を死ねなかったのである。

そのことを海は、発言しているわけなのだろう。サイパン島玉砕をテーマとしながら、この詩はさまざまな思考へと私を導く。現在でも交通事故で奪われた幼児の生命、心ならずも不自然に中断を余儀なくされた生命たちは、行方不明のままさまよっているのではないか……。私たちのなかに。

そして私たちがわれらの文化と呼び、伝統と指しているものも、実はこれら行方不明者たちの捉えがたい怨み、曖昧な不燃焼のこゝとではなかったのか。

この詩は戦後十五年の時点で書かれたことがわかるが、美しくも凄味のある言葉を生んだのは、戦後間もなく公開されたサイパン島玉砕の記録映画（アメリカ側による）をたぶん、石垣りんが見てのち、十五年近くもそのショックを持続させてきたことと、その体験をみずからの暮しの周辺のなかで、たえず組みたてたり、ほぐしたりしながら或る日動かしがたく結晶化させたものだからだろうと思う。

いくらい、まだるっこしくも感じとられるのは、こわいくらいである。

後日譚になるが、この老夫人の夫が癌にかかった。何度も手術をし胃潰瘍ということにしてあったが、夫は荒れに荒れた。医師を罵り、附添いの人に当たった。曖昧さが我慢ならなかったのだろう。それを見定めた老夫人は、やはり静かに夫にむかい、癌であることを告げた。夫は一夜、まんじりともせず天井を睨めつけていたそうだが、明けがた「すまなかつたな」と一言わびて、以後いい病人となり、ごく平静に死を迎えたそうである。人によって考えかたもまちまちだろうが、自分の命にとどめを刺した病名ぐらひは確認して、逝きたいと願う人も無い筈はない。夫妻ともどもに正確さへの志向を強く持っていた人たちだった。何故かはしらねども、人間は正確さへ正確さへと溯りたがる動物である。それを満足させられたとき、「美」と感受するものが人間にはある。

第三に、体験の組織化ということがある。これは人間の言葉を、言葉たらしめる一番大切な要素に思われる。これさえうまく出来ないとすれば、たしかに「大人は子供の夕暮」なんだ。

日本人の数すくない美点の一つとして、記録愛好癖があげられると、かねがね私は思っている。あらゆる階層にわたって、日記、メモを書き続ける人口の多いこと、多種の記録が大切に保存されること、古い庄屋の蔵から江戸時代の大福帳など現れて、大いに研究に資すること、流人となって流された島でまですぐれたル

ポルターージュを書き残した庶民があったこと、正史の途だえた部分を公卿の日記が期せずして埋めたりしていること等々。

よほど読んだり、書いたりすることの好きな民族であって、他民族との比較の上でも、かなり上位を占めそうに思う。ひよっとしたら第一位かもしれない。これらは、自分の生きたことをかなり大切に扱ってきた、また扱いつつある証拠だろうが、惜しむらくはそれらのことどもが、あざなえる縄のごとくに、うまくよじりあわされてこなかったことだ。結果としては、行雲流水、てんばらばらに散らばっているのである。いにしえより、これだけの記録愛好癖を持った民の言葉が、力強さや、ずしりとした重味に欠けているのは、体験の組みたてに、自他の体験の組織化に大いなる欠陥があったのだと思われぬ。

思わず悲観的になってしまったが、それはこの小文の主旨ではなかった。体験の組みたての、まことにすぐれた例として、一つの詩を紹介したい。

崖

石垣りん

戦争の終り、

サイパン島の崖の上から

次々に身を投げた女たち。

代の発見はむしろ「子供の夕暮」という言葉のなかにあったという方が正當かもしれない。

躰けられ、仕込まれた子供が、やがて一人前の大人になって成熟してゆく——この過程を誰も本気に疑ってみようとはしないけれど、本当は人間存在の輝き放つのは、子供時代から青春前期くらいにかけてであって、それが次第にくだらなく黄昏れていったのが大人かもしれないではないか。

この一行は、折にふれて、この十年あまりひとつのメロディのように私のなかで鳴る。時に反撥し、時に素直になり、いまだにゆれ動いていて決着がつかないが、「大人は子供の夕暮ではない」とほんとうは言いたいのだ。

が、当面、自分を実験台にのせて、もう少し様子をみる外はない。世界的な規模で「教育」というものへの若者の反撃が始まっているのも、なんだかこの一行とも無関係ではなさそうである。

第二に、正確な言葉は美しい。正確さへのせめて近似値に近づこうとしている言葉は美しい。研究論文であっても、描写であっても、認識であっても。

文学的な正確さは、ふつう言う意味の正確さとは、一寸次元を異にしている、これもきわめて大切なものだが、ここでは触れない。

私が二十歳の頃、田舎のある家を訪ねたことがあった。主人に用があったのだが、初老の奥さんが出てきて、静かに言った。「主

人は今、ちんばの裏つぽに腫瘍でまふしができて、伏せつとります」私は仰天し、あとは、しどろもどろとなったが、当時きわめてはしたなく思われた言葉も、今となってみると、置かれた状況を説明するに正確無比、要らざる憶測を避けるという意味で間然するところがない。部位の名称が、あまりにあどけない幼児語ではあったけれども。

これは私のなかで、いつしか美しい言葉の部類に昇格した。と言っても人を納得させるわけにはいかないだろう。この夫人は小学校しか出ていない人だったが、品格があり、教養とはこういうものかと思わせるものが身に添っており、しんと落ちついていて、私の好きなひとだったのだが、その人柄を抜きにして、言葉だけでは何もわからないに等しいからだ。このことから私は考える。言葉とは、その人間に固有のもので、とうてい切離すことができないのではなからうか。

美しい言葉だと聴いて、そっくりそのまま真似してみても、その人と同じ美しさを維持することは絶対に出来ない。彼女の言葉も、他の人が言ったのであれば、このように忘れがたくは残らなかったような気がする。「文は人なり」と同じように「言葉は人なり」で、人格の反映以外のなものでもない。普遍的に美しい言葉などというものはあるのだろうか。非常に疑わしいのである。

「……でございます」という、非のうちどころのないと思われる一言さえ、発する人次第で、爽やかに、また叫び出した

学者、作家が入りまじった座談会などで、作家の言葉の方が俄然、精彩を放っていきいきと感ぜられるのを、何度も見聞してきたが、これは学者に比べ、作家の方が自分の弱さを隠さないという修練ができている賜物なのだろうと思う。

整理されたなかに、未整理の部分を含んだ言葉も、或る緊張を強いて美しい。もともと人間は、そういう存在だからだろう。

語られる内容と、言葉とが過不足なく釣合っている場合も、きわめてころよい。政治家の言う「小骨一本抜かない」「衿を正す」などは、なんらの実体も感じさせない点で下の下である。言葉は浮いてはならないのだ。

鷗外の短篇「最後の一句」は、言葉の発し手と、受け手とが、びたり切りむすんだ時、初めて言葉が成立するという秘密を、あますところなく伝えてくれている。全身の重味を賭けて言葉を発したところで、受け手がほんくらでは、不発に終り流れてゆくのみである。言葉を良く成立させるための、条件というものがあるらしいのだ。戦後の幾つかの大きな裁判は、これらの条件が如何に欠けていたかを教えてくれる。

何項目にも分れてしまう、いろんな考えのなかから、私の最も大切に思われるものを、次に三つ挙げてみたい。

第一に、その人なりの発見を持った言葉は美しいと思う。どんな些細なことであっても。

知りあいの女性が或る日、ぼつんと「うちの亭主のいいところは、まるで野心というものを持たないことだわ」と言った。投げやりではなく、諦めでもなく、夫の美点をまことに慈むような言いかただった。女はなべて、野心に猛り闘志満々の男に惹かれるものだという公式的な観念を、さりげなくぶち破っていた。ひどく新鮮に響いたのは、あとで考えると、彼女なりの発見がこちらを打ったのであろう。自己顕示欲でぎらぎらしているような、また拝金主義でへとへとのような世相に対する抵抗も含まれているようであった。

野心を持たず、しかし、やるべきことをやって素敵な男性というものは、この世に多いのだが、女性によって良く発見されているとは言えない。能なしとか働きが悪いとかで片付けられているのが落ちである。こういう、さらりと涼しい言葉が出てくる基盤として考えられるのは、彼女もまた共に働いているからではなかったろうか。

十年前前に出た加藤八千代詩集『子供の夕暮』のあとがきには、こう書いてある。

大人とは 子供の夕暮ではないのか

これもまた、私には一つの発見に思われた。もったもったという考えは、これまでも沢山あったかもしれない。だから加藤八千

美しい言葉とは

私のいやな言葉、聞きぐるしいと思っている日本語は無数にある。出せといわれたら、ずいぶん沢山出してみせられるだろう。

日本語について多くの人が語る場合も、たいていは、その否定的な面を指摘することで尽きている場合が多い。いやな日本語を叩きつづけば、美しい日本語が蘇るというものでもないだろう。否定的な側面を指摘するのと同じくらいのエネルギーで、美しい言葉に対する考えをかきたててゆきたいし、多くの人の、いろんな形による発言を聴きたいものだという願いが、私にはある。

しかし、美しい日本語に対する発言や考察が、ひどく乏しいというのは、どういうことなのだろう。まずいものを食べたときは「まずい、まずい」と大騒ぎするが、おいしいものの通過するとき、割にけろりとしているように、美しいことばというものは、生活の隅々で意識されず、ひっそりと息づき、光り、掬いたいものであるためか。

それとも美しい言葉とはどんなものか？ というイメージが、私たちにきわめて貧しいためなのだろうか。

そしてまた、いやな日本語で一致点を見出すよりも、美しい言葉で一致点を見つけ出すことの方が、今日、はるかに困難なのを暗黙裡に悟っているためなのだろうか。

文学者の場合は、答は、はっきりしている。美しい言葉を掴み出そうとして、四苦八苦したありさまと成果は、その作品をみれば明らかだから……。

ここで触れたくおもうのは、なるべく文学作品は避けて、もっと身近な、日々空気のように必要な言葉たちのなかから、幾つかの例をとりだしてみたいのである。生まれてこのかた、私もずいぶん長いこと日本語を聴いてきたわけだが、私なりの「美しい言葉とは」というものが、いろいろに沈澱してきている。おもに女のひとの言葉を例にとりつつ、少し整理してみたい。

いつまでも忘れられない言葉は、美しい言葉である——二つは殆んど同義語のように私には感じられてならない。忘れられないというのは、よくもわるくも一人の人間のまぎれもない実在を確認した、ということの意味するのもかもしれない。たとえこちらの胸に刺のように突きささっているものであっても。

また、人間の弱さや弱点を隠さなかった言葉は、おおむね忘れがたいし、こちらの胸にしみとおる。このことは既に子供の頃から感じていて、だから「さらけだす必要もないが、しかし、自分の弱さを隠すな」と、ずいぶんと自身に言いきかせてきたのだが、過ぎこしかたを省みると隠蔽の気配のみが濃いようだ。

ある。そしてそのための広告手段が最大級の、人目を打つ言葉を総動員し、従って広告は一見美辞麗句集の観を呈し、多くの美しい語彙を汚辱することによってこれを使い物にならぬようにしてしまい、却って一般の語彙を貧困化させていることは、かつてオルダス・ハックスリーの憤激を以て指摘した通りである。(例えばサーヴィスという美しい言葉の濫用の如き。)言葉に対する一種の不感症の蔓延、批評の独立と權威との失墜も、こうした事情に附随して起こるマイナス面のうちに数えられよう。

こうしてジャーナリズムは作家というものを、あたかも己れの奴隷のように強制して思うがままにこき使うことになる。今日、ジャーナリズムの上に活字になる文章の多くはいわゆる注文原稿で、ことに流行作家はもはや自分を失った、他に奉仕する強制労働者にすぎない場合が多い。例のオプライエンのアメリカ式警句を以ていえば、彼は文学的産児制限をすら行なうことを許されないのである。(文学的生めよ殖やせよ。——アプトン・シンクレアの作品に『金を書く』というのがある。ジャーナリズムは今ではこの「金を書く」世界に転落してゆく大勢にあるわけだ。「金は全く近頃の文学の原動力であり神である。」ここにアルフレッド・ミューセのいわゆる「ジャーナリズム殿とその数々の茶番狂言」の一切の楽屋裏があるのだ。

「文学を解しない輩どもが、出版書肆に侵入しながら、そしてそこ

で一攫千金のほろい儲けを夢みながら、分別のある胸算用を緘黙させ欲深い僥倖心を掻き立てた。かくして各自は樹木を根のところで断ち切りながら、一直線に彼の利己主義のなかへ突入して行った。各自はそこを通りながら、地盤をその足下に掘り崩した。後から来る者なんて構うもんか。我々のあとには洪水あれ！作家は取りきめられた裁ち型のなかへ自分の頭を容れながら、いわば一年均しに、そこには見込み外れが起こっていた。つまり売りに出され、前以て支払われた書物は必ずしも実績を収めることはできなかったのだ。香ばしからぬ訴訟があまりにもしばしばこれらの悲惨事を解き明かしている。だから、そのように破滅のあらゆる原因、御当人の山師根性と、作者たちの気難しい要求と、ジュルナル(定期刊行物)の誅求のあいだに板挟みになった出版書肆が……今にもへたばりそうになっているからといって、今更何の驚くことがあるう。」

これを書いたのは、現代において周期的に見舞う出版ジャーナリズムの危機の一つを目の前にした、どこかの評論家ではない。この文章の日附は一八三九年九月一日であり、署名者はサント・ブーヴ、彼の「産業的文学」と題する、極めて予言的な評論のなかに見出される。——私はこの天才的評論家が『現代の肖像』の我々の傷痕である」と書いていたことをいま思い起こすのである。

がそのよい方の一例であるが、これは他の反面において、ジャーナリズムが速度を重んずるが故に——新聞を「書かれた即興作品」improvisation écrite と名づけた人がある——一般に機敏に書くことが作家・記者、リポーター等に要請される結果、それが言語の粗雑化を齎すことも避け得られない。かつてフランス・メーリンクは言語の野蛮化、質的低下の罪を専ら日刊新聞に負わせてこれに非難を浴びせたことがあるが、新聞の蕪雑な言葉が今日の大衆の語彙に大きな影響を及ぼしていることは否定し得ない。新聞の暗示力、不知不識のうちの強制力がそうさせているのだ。

次に、この際それよりも重視せらるべきは、言語の標準化と共に、文学そのものも規格化せられる傾向があるということだ。つまり最大多数の読者層の低い趣味や卑俗な要求に応じて作られてゆく一定の標準に照らして、作品をその間尺に合わせて作るということが、作家に強制せられるのである。ここでは、新奇を追うということと古きを墨守するということ——これは古くからの大衆的習性であるが——この二つの大衆の傾向に、文学は極めて浅薄な形で迎合させられる。従って大衆ジャーナリズムの上では、天分ある独創的な作家は己れの持ち前をある程度犠牲にしなければ成功する機会はないわけである。アメリカはそのような大衆ジャーナリズムの古典の本場であるが、オプライエンという作家が言っている。「アメリカの短篇小説の一定の型からのいかなる逸脱も、それは疑いもなく間違いである。そんな逸脱をやらかす軽率

な作家は出版者をなかなか掴むことはできない。」またこうも述べている。「作家は出来るだけ一般の人間の水準と一致しなければならぬ。……だから彼はいかなる新しい見解を提出することも禁じられていたのだ。アメリカの編集者が作家に与える理想的な贈物は、標準化ということだ。作家は絶えず同じ小説を書き続けなければならぬ。」この言葉に新しい尖端的な衣裳をつけた中身は旧態依然たる——という注を附け加えれば、それはアメリカに限らず大衆ジャーナリズムの支配下にある世界ならどこにでも通用する定式であるといつてよいであろう。——そしてこの水準低下の試みは、言いかえると、作品の通俗化ということである。一流の作家があまりに立派に書くということのために、却ってかかるジャーナリズムから敬遠され、駆逐され、締め出されている光景は、現代に見られる悲しき風景の一つではなからうか。

第三に、ジャーナリズムは時代の尖端を歩む——だからそこでは常に尖端だけが問題なのだ。「ジャーナリズムは後世に対しては何物をも遺さない、そして後世のために働くことをしない」と書いたのは、たしかアルフレッド・ネットマンである。従って多少とも持続性のある、堅牢な、そして long-range な作品をジャーナリズムは本能的に好まないのである。ジャーナリズムがいわゆる流行に遅れをとるまいとするのみか、時として、否、今日ではしばしば流行を追っかけるだけで満足せず、自ら流行を作って読者に新しいセンセーションを喚び起こしてゆくことは周知の事実で

歩によつて可能にされた書物的企業——つまり利潤を目的として商品を生産する企業の一つの形態としての現代ジャーナリズムが、いわば文字の企業化として、いかにおよそ文字によつて表現し得られるあらゆる部門を蔽い支配しているかという一つの社会的事実である。このことを逆に言ってみれば、現代においては、政治も経済も、科学も芸術も、あるいは宗教、教育でさえ何等かの意味でジャーナリズムに依存し、また関係を取り結ばなければ、己れの生活をつづけてゆくことができず、それぞれの機能を十分發揮し得ない始末であるから、ジャーナリズム抜きでそれらを論ずることはできぬということだ。——ここでは主として現代文学とジャーナリズムとの関係を中心として、ジャーナリズムの作用を究明してみよう。

今日、文学の首座を占めているものは小説であるが、それはこのものが近代文学のうちで最も大衆性をもち、そしてかかる性質はこのジャンルが最も可塑的な最も自由な形式のものであるが故に、どんな外部からの要求にでも応じて形をとり得ることから来ているといえるだろう。ところでジャーナリズムの生産する商品である新聞雑誌等の定期刊行物は原則として利潤的企業であるから、出来るだけ広汎な購買者を見出さなければならない。そのためには、出来るだけ大衆的な通俗的な文学でなければそれに適当しないわけであるが、小説はあたかもこの要望に応じ得る殆ど唯

一の文学形態である。小説が早くからジャーナリズムに利用せられ、また小説の方でも進んでジャーナリズムに順応しながら己れの成長を遂げ、今日の隆盛を致すに至ったのは、かかる理由に基づくのである。

もつともジャーナリズムの発達の歴史をふりかえてみると、過去の段階においては、その顧客がその時代の最も高度な知識階級に限られていたような場合もないではない。またジャーナリズムが知識階級に対して、もつと低い一般大衆の知的芸術的要求以上に顧慮を払っていたような場合もある。更にまた現代において大衆ジャーナリズムが圧倒的であることが事実であるにしても、資本主義社会とは分業の極度に進んだ社会であるから、他面においてはそれぞれの専門知識層に向けられた分業化した高級ジャーナリズムの存在していることも厳たる事実である。近代文学に関する限りにおいて、いわゆる純文学を発達させた功労者は、主としてかかる高度の知識的ジャーナリズムだったことも忘れられてはならないのである。にも拘わらずジャーナリズムが、今日の段階においては、もはやそれが進歩と向上との推進者であるか、退歩と頹廢との阿片であるかは甚だ疑問になって来ているように思われる。従つて我々は現代ジャーナリズムのプラスと共にそのマイナスの決算報告を試みてみる必要がある。

第一に、ジャーナリズムが社会に及ぼす影響として、文化の水平化、規格化ということがある。新聞による言語の標準語化など

単なる地方的宗教論争——ウィットテンベルクの宗論——を一つのヨーロッパ的改革に変えたわけだ。ルターが活字印刷を以て、「神がそれによって福音の大義を進めるべき最高至上の賜物」と呼んだのもことわりである。

このようなスピーディーな継続的出版の流行と成功は、機を見るに敏なるイギリスやネーデルラントの印刷出版業者に、時代の耳目をひく政治的社会的現象を正確に報道する定期的刊行物を発行することの儲かる企業であることを見抜かしめた。かくて一六〇五年、アンヴェルに週刊新聞 *Wekelyke Tydinke* 一六二二年、ロンドンに *Weekly News* が現われ、ここに本来の意味のジャーナリズムがはじめて確立せられたのである。

面白いことに、ジャーナリズムは、その誕生の発端から、内容的にはより政治的な方向のものとより市井的な方向のもの、動機的にはより権力欲に発するものより利潤欲に発するものを示していることだ。後に十九世紀の終りに至って、イギリスにはマシュー・アールズがニュー・ジャーナリズムと名づけたジャーナリズムの新展開が見られるが、このものより広汎な読者大衆の地盤の上での、彼等を目差した大衆の新聞におけるこの分化の意識的推進の形をとっていることは注目されてよい。すなわちその新展開の天才的推進者だった二人の同時代人にして友人同士たる一人、「大衆ジャーナリズムの父」ニュートンズは、自由党の大立物ジョン・モレーイを主幹とするペル・メル・ガゼットの副主幹として

縦横の才を揮ったその親友ステッドに言及しながら、次のように記している。

「ジャーナリズムには二種のタイプがある。一つは内閣を作ったり、その秘策を暴露したり、場合によっては政府を転覆したり、その他すべて公事を取り扱うものだ。正に無冠の帝王と称すべき大事業だ。これが君のジャーナリズムだ。しかしそれとは対照的に、そんな大きな野心を毛頭もたぬジャーナリズムがある。それはただ営々と働いている大衆がささやかな楽しみや気晴らしを求めているから、それに健全な無害な言葉の響應をするだけを目的とするものだ。これは全くへり下ってえらがないのだ。それが私のジャーナリズムだ。」

そしてこの二つの傾向を更に推し進めると、一方には犯罪やセックス・スキャンダルを誇大にセンセーショナルに囃し立てるハースト系のいわゆるイエロー・ペーパー（黄色紙）の如きものが現われ、他方にはこれを「文字を知っている無知な大衆」の悪趣味に迎合するものとして排撃し、新聞に勤労大衆の闘争手段、啓蒙機関の意味をもたせて、政治宣伝と階級報道に重点を置く、例えばレーニンの『イスクラ』や『プラヴダ』の如きいわゆる階級新聞が現われてくるのも自然の成り行きであろう。

しかし私はいまここでこのようなジャーナリズムの歴史を——それがいかに興味ある題目であるにしても——辿っているわけには行かない。私が考えてみたいのは、印刷技術と製紙工業との進

最初から資本主義の企業的精神と深く結びついて登場して来ているという事実である。ジャーナリズムを可能にした前提条件は、活字印刷術の発明と製紙業とであるが、印刷出版業がその第一歩から資本主義的企業の形態をとったことは、グーテンベルク、フストの場合に明らかであろう。グーテンベルクは金工フストに千七百ギルダーを投資させてその事業を開始しているのである。そして近代における最初の同盟罷業がフランスのパリ及びリヨンにおける印刷職工の組合罷業（一五三九—一五四二年）であったことも、そこに早くも近代資本主義的産業機構の発達しつつあったことを物語っている。——この活字印刷術は手から機械への飛躍であり、従ってそれは一つの革命である。西洋では、ホメロスの昔からキリスト教的中世の終りまで二千年間、書物という書物は悉く manuscript（手写本）に外ならなかった。しかし「動く印字」movable types の発明と共に、それは完全に新しい方向転換の道に踏み入り、その極まるところついには現代の高速度輪転機印刷にまで発展してゆくのである。多くの人々がこの発明をもって人類史最大の出来事としているのも当然である。

この活字印刷の欠くべからざる道伴れとなったのが、中世伝来の羊皮紙や犢皮紙を駆逐した紙であるが、この紙が人間の心意を開放したのとして、印刷術の発明よりも紙の製造の方に遙かに重大な文化史的意義を認めているのは、H・G・ウェルズである。「ヨーロッパを蘇生せしめ得た最大の恩人は東洋から齎された紙であ

る。世界中に聖書が夥しく溢れる。学校用の書物が廉くなる。読書の術が見る見る普及する。字がはつきり刷れているから、判読に頭をひねることも要らず、読みながらすぐ理解し、考えることができる。各国の雑多な地方的方言がたちまちのうちに標準イタリア語、標準イギリス語等々にかわられてゆく。——かくして十五世紀と共に、ヨーロッパ文学の真の歴史がはじまるのである。」——この紙の重要視は甚だ一面的で、既に十二世紀にヨーロッパに伝えられていた紙に、そのような意義あらしめたものがとりもなおさず印刷術の発明だったことは言うまでもない。製紙工業が盛んになって活字印刷が隆盛に赴いたのではなくて、活字印刷の登場によって製紙工業も急激に膨脹したのである。しかし製紙が十八世紀の末に至るまでは殆ど原始的な手工業の域を出なかったことは、この際注意しておく必要があるであろう。製紙がその機械的大量生産をやり出すのは、やっと二十世紀になってからのことであり、だからもし「紙の時代」と称し得る時代があるなら、それは実に現世紀にはかならない。

この活字印刷と紙とによる新しい書物生産様式を全面的に利用して近代ジャーナリズムの先端を切ったのが、ほかならぬ宗教改革者たちであった。すなわち彼等はカトリック教会勢力の反撃に對して、プロテスタンティズムを擁護し更にはこれを普及するために、政治新聞の萌芽形態とも言うべき小冊子を矢継早に刊行したのである。グーテンベルクの技術がルター思想に翼を与えて、

の周辺に生起する出来事を大小を問わず知りたがっているから、そのための公私の告知板が古代にも中世にもなかったわけでは決してない。例えば、ローマにおけるカエサル（シーザー）の制定にかかる *Acta Senatus*（これは元老院や人民議会の議事録の日次の公示である。）や、すでに民衆の「三面記事」に対する嗜好に投じている *Acta diurna* の如きがそれである。しかしこれらの際においても、そのニュースが大衆にまで届くのは、やはり口から耳へであった。一般的にニュースの媒介所となったものが、人々の最も繁く集まる場所だったことは、例えばギリシアにおけるアテナイの人民集会の場所だった *Pnyx* の場合に窺われる。そこでは好奇心の強いおしゃべり好きな閑人たちが新聞の編集をさえやってのけていたのである。「何か新しいことはないかい?——フィリップス王が死んだ!——いや、病氣だということだ。」といったわけで、みんながそのようにいろいろと情報を持ち寄って真相を究明するのである。——この「話される新聞」がどんな性質のものであったかについては、デモステネスの峻烈な嘲笑がそれを彷彿させている。中世では、リポーターは旅廻りの *jongleurs*（吟遊詩人）や巡礼者や遍歴職人であり、そしてニュース媒介所は広場の市や宿屋、酒場や城館の広間などであった。

そして近代においてさえも、そうした場所が依然としてジャーナリズムの雰囲気や伝統的に保持していたことは、フランスのサロン、イギリスの茶館やカフェ、日本の床屋や銭湯などがこれを

雄弁に物語っている。アメリカの新聞の父ベンジャミン・フランクリンについて、ベルナール・ファイの書いていることは、この点甚だ示唆的である。「ベンジャミン・フランクリンは、かみさんたちがどんな事を言ったか、駅長さんがどんな事を話したか、長い航海をして来た船長たちがどんな話をしたか、といったようなことを知るためには、自分の店がそれと向かい合って立っていた市場へ降りて行くとか、更に百メートルばかり歩いて港に近い居酒屋まで行くとかすれば、それでよかった。かくの如きがすなわち彼の三つの通信社だった。これ以上古い通信社もなからうし、これ以上豊富な通信社もまたない。一七五〇年までは、それらが唯一の通信社だったのだ。」イギリスでも、近代ジャーナリズムが、十八世紀に盛んになった茶館やカフェをその発祥地としていることは、スチールの有名な「タトラ」や、彼とアディソンとの共同編集になる「スペクテーター」がこれを示唆している。ニュースも世論の動向も流行の変遷も、種はみな「バットン軒」とか「イルスのカフェ」等々から出ているのである。——かくて口誦性をもった、文字通り口から耳への新聞だった、こうした原始的新聞たる「盛り場」が、近代的ジャーナリズムの生みの親であることは、甚だ興味深い事実だと言わなければならない。

そこで早速問題を近代ジャーナリズムの方に移して行こう。先ず私のはじめに力説しておきたいことは、近代ジャーナリズムは

イルムの回転のように、コマの一つ一つはそれぞれ固定した写真であるのに、そのスピーディーな展開が運動と同じ効果を發揮するからである。それは月刊や週刊の雑誌、ことに日刊新聞において著しい性格であるように思われる。

現代において最も広汎な読者層を有するものは、新聞雑誌である。そして今日では文芸作品はもとより学術論文の如きも書物になる前、すなわち単行本として出版される前には、多くの場合、このジャーナリズムの道を一度は通過するから、文学のいかなるジャンルといえどもその作用と影響とを受けていないものはないといえよう。

しかしジャーナリズムを正面から考察するに先立って、ここで先ず既に述べたことと関連して二、三の注意をしておく必要がある。——その一つは、口誦文学という浮動的文学においては、その各々の反復がそれが一つのものの反復にも拘わらず常に「新版」的意義を帯びているのに対して、定期刊行物、ことに新聞においては、その各々の版はそれが常に新しきものの提供にも拘わらずそれに先立つ版を無効にする——とは言えないまでも、その存在を甚だ意味少なきものにするということである。新聞雑誌のバック・ナンバーが古本屋の取引の対象となることが極めて稀で、主としてそれが廃物として利用されるか屑屋相手の下り物となっていることがそれを象徴する。ことに news 本位の新聞においてこのことは著しく、その例外の場合は単行本に近い季刊、月刊の

学術雑誌や好事家向きの特殊雑誌に限られる。新聞においては、今日版のニュースは昨日版のニュースをもちやニュースの地位から引き降ろすのである。あるいはきょうの夕刊は早くもきょうの朝刊のニュースを……。

次に、このジャーナリズムの王座を占める新聞においては、個人的著作という特徴は著しく減殺されて、再び別な形での共同製作という特徴が支配的になって来ていることもこれまた誰の目にも逸せられない。その公刊の著作権は一種の共同著作権なわけで、従って新聞記事を蔽うものはその匿名性であるといえる。我々は新聞記事のこの匿名性を無責任なものとは考えないが、しかしその匿名性が時として無責任を包含していることも打ち消すことができない。この匿名性がいわゆる赤新聞の蠢動を可能にしているのである。

かくて古代から現代へと広義の文学を極めて大ざっぱに大観すると、伝統的なものへの興味、独創的なものへの関心、新奇なものへの好尚と言った風に焦点が移動して来ることがうかがえるよう。そして現代の大衆はこの三つの要求を多少の度合いにおいていずれをも有しているから、現代ジャーナリズムの苦心の存するところはその三つの需要をいかに巧みに按配して満喫させる供給をするかという点にあるといつてよい。

第三に、狭義のジャーナリズムとは民衆の求めるニュースの報道を提供する方式や制度のことだが、いつの時代にも民衆は己れ

第三に、書物というものは原則的には個人的著作を意味する。

口誦文学が多くの場合その匿名性を特徴とし、文学的職業団体の一種の共同財産の意味を有していたのに対して、書物文学においては著者＝個人がその作品に対して自分の名前でこれをいわば封印し、その権利を主張している。従って近代の著者たちは偽造とか剽窃とかに対して自己の作品を擁護する所有権——著作権やその書物に対するいわゆる版權などを法律によって確保している。

このことは近代における個人主義の発展、人格尊重の風、作家の地位向上、職業としての文筆業の成立等、いろいろな条件が働いてそうやって来た現象ではあるが、古代、中世では一般に作品の背後にある作者というものを余り問題にしないのに対して、近代では世間は作品よりもその作者の方に一層の関心をもつ場合の少なくないことは、これも著しい対照の一つであろう。——周知の

如く、古代、中世においては、現今ならば剽窃とか盗用、または借用と呼ばれて破廉恥行為と見なされる行為がひろく何等の非難も浴びずに行なわれていたが、これは文学的所有権の意識がまるでそこにはなかったこと、思想とか芸術とかは世に現われる途端公共的なものと考えられていたことを示すもので、現代の尺度を以てしては到底律し得ぬ現象に属する。

第四に、このことと関連して言われなければならぬことは、個人的著作の優勢は独創的なものに対する努力と心遣いとの結果であり、また原因でもあるということである。もちろん口誦文学に

も個人の創意というものがないわけではないが、しかし昔の人々は大してそんなものを本義としていないのである。むしろ口誦文学時代に人々が興味を寄せているのは、今日では紋切型だとして擯斥されそうな伝統的なものである。人々は耳にたこが出来るほど聴きなれている文学を又しても又しても聴こうとするのである。口誦文学では、どうも新しさよりも古さの方がどちらかというところ尊重される傾向がある。——この意味では、だから、固定しているのは口誦文学の方であり、自由なのは、動いているのは書物文学の方であると言われなければならない。書物文学では、個人＝作者は一つ一つの書物において次から次へとにかく新しい相貌の作品を提供しなければならぬが、口誦文学の詩人はそのレパートリーの中にある同じ物語、同じ言い廻しを飽きるほど繰り返していても済むのである。

この「新しさ」新奇なものの提供がそのテンポを早め、その提供手段たる出版がその頻度を早めたものが、現代社会に大きく君臨するジャーナリズムであろう。これは口誦文学ではないが、もし口誦文学を浮動的文学と名づけ得るならば、ジャーナリズムは新しいジャンルと新しい性質との浮動的文学と言い得られないであらうか。(断わるまでもなく、私の使っている文学という言葉は、この際ひろい意味の場合の literature である。)——つまり一つ一つの定着が矢継早に展開されるために、それはちょうど映画のフ

作品はその職能を発揮するのであった。従つて文学的公衆の限りにおいては、少数の例外を除いて、古代、中世では読者はなく聴衆のみがあったことになる。聖書の「福音書」なども本来 public reading を目差した朗読用のテキストにほかならなかつたことを想い起こすべきである。

私は近代文学を考察する際、古代、中世文学のこの口誦性に対する近代文学の書物性ともいふべきものの相違を最も根本的なものの一つと見なすものである。第一に、右に述べたような事情から明らかな如く、古代、中世の文学はある程度の浮動的な、不安定な性格を担っているに對して、近代文学にはそれがない。書き下すということ、書物にいきなりして世に問うということは、かかる意味での浮動性をはじめから封ずることであり、文芸作品にのっけから固定性を賦与することである。もしそれに變改を与える必要に迫られるならば、だから「版」を改めなければならぬだろう。

次に口誦文学は詩人が聴衆として大衆をもつが、書物文学は作家が読者層というものを相手にする。口誦文学は無学文盲な人々にも結構味わい得られるが、書物文学は一定限度の教養がなくてはこれに近づくことが出来ない。もちろんある学者が言っているように、文学が書くことに委ねられる時には、読書階級と非読書階級とのあいだに深い溝が生じ、書物の出現と共に、社会の大部

分は文学的意味において公民権を剝脱されるというのは言いすぎである。それは西洋の中世初期のように、民衆の九十パーセント以上もが文盲であり、また書写本の数が極めて乏しかった時代においてはあてはまるかも知れないが、モールトンがここで考えている近世の活字本の出現の場合は、事実上、特権上層階級とは殆ど關係なく、むしろ民衆の知識的文学的要求と密接な關係のあつた出来事だつたことを見落としてはならない。このことは、活字印刷術による最初の書物が、聖書、祈禱書、曆等民衆の最も需要の多い種類のものだつたこと、ルネサンス運動の担い手だつた人文学者たちは概して豪華な手の混んだ羊皮紙書写本を愛して、大量生産の利く当時はまだ貧弱な活字本を輕蔑していたことなどからも明らかであろう。活字印刷術の發明をルネサンス運動の結果促された古典の印行に結びつけて考へるのは間違ひであつて、この發明は深く民衆の目覺めと結びついているのである。従つてこの學者のように口誦文学の相手を全民衆、書物文学の相手を甚だ限定された読書階級と見ることは必ずしも事實に照合しない。少なくとも現代の文明社会では、つまり書物の行なわれている社会では、むしろ民衆の九十パーセント近い数が、程度の低いものならたいいていの書物を読み得る人々であるだろう。活字印刷術による書物の大量生産が教育の普及にあずかつて力があり、逆にまた教育の普及が書物文学の需要をますます増大せしめて、今日の狀態を現出せしめたのである。

ジャーナリズム

文芸というものを印刷された書物の上で味わいつけている我々にとって、書き且つ刊行するという行為に委ねられない文芸の行なわれていた一千年以上にわたる永い時代が過去にあったということは、多くの場合忘れられている。従って人々はまた逆に古代や中世の文芸が東洋でも西洋でも我々の時代と同じ諸条件のもとに生まれ、展開されたものだと考え勝ちである。しかしそれほど素朴な謬った態度はない。古代や中世の文芸の第一の特徴は、その口誦性である。これを文芸の享受者側からいえば、それは耳で聴く文学であって、目で読む文学ではない。今日のように、散文小説の読者が印刷された書物を黙読するといった形での文学的鑑賞は、実は一般的には僅々数百年來のことであることを知らなければならぬ。つまり文芸は歌われ、物語られ、また多くの場合演技されさえていたのである。文字が発明され、書く技法や手段が発達した以後においても、文芸作品は永い間吟誦詩人によって創作され、保存され、伝承され、そして大衆のあいだに流布されていた。否、文芸ばかりではない、例えば法律でさえ、クレタやスパルタにおけるが如く、音楽と詩との形式で民衆に対して布告されたことが伝えられているし、輪唱歌に作られた法律が食後に唱われたという記録ものこっている。アリストテレスは「法律

を歌う風習」は書くことの発明せられる以前における「記憶の助け」に資するためだと説明しているが、ギリシアでは書くことが知られるに至った後においても法律は書かれないでいた慣習のあったこともブッチャーが『ギリシア精神の諸相』のなかで指摘した通りである。——この意味で、昔の吟誦詩人は一面「人間書物」生きた書物だったわけで、その頃は人間の記憶が文書、記録の代わりをつとめ、口と耳とが手と目とよりも遙かに重きをなしていたと言われなければならない。

そんなわけで、文学は一つの動きのとれない書き下された作品として厳格に固定されるようなことはなく、一つの作品はその原作者たる詩人によってその一生の間に絶えず修正を加えられるのみか、また別の詩人たちによって変改され、省略され、増補されてさまざまな変遷を経ていたのが常態である。そして後にそれが書き留められて書物になる場合があっても、それは決して一般読者というものを予想したものではなく、吟誦詩人たちの自家用覚え書、テキスト以外の何物でもなかったから、これは書物とは言っても記述文学に属するものではなく、やはり口誦文学に属するものである。言いかえると、文書はどこまでも従属的な地位を占めるものに過ぎず、それが口で語られ、歌われてはじめて

管が出て、うねうねと壁の面を這っている。

菊の花のかたちをした小さい栓^{せき}が三つ、壁に並んでいる。壁から、キノコのように生えている。地面にも、釘^{ボルト}のような形の栓が、二つ三つ、四つと突出している。なにか、それらは生きもののように見える。モグラの鼻の先のようにも見える。

ゆみ子は蹲^{すく}まって、指先でその釘のかたちに触ってみる。冷たい金属だが、ざらざらした錆のためか、かすかな体温に似たものが伝わってくる。

壁を這っている管に、耳を当ててみる。かすかに語りかけてくる音が聞えてくるような気がする。管の中には、水が流れているのか、蒸気が動いているのか、あるいはただの空^{から}の管なのか。たしかに血管をめぐる血、心臓の鼓動、それに似た微^{かす}かな気配を感じる。

人間のいない風景、それがいまのゆみ子には懐しい。ゆみ子の身に親しい。無機物が、やさしくゆみ子に語りかけ、体温を伝えてくる。

しかし、ゆみ子はやがて立上り、路地の狭い出口へ向う。「銀の鞍」へ行くつもりなのである。

『技巧的生活』の女主人公が一本の樹木もない、鉱物的な、「無機」的な都市の夕暮れのなかに姿を消すといふ散文詩的な結末は、あの自然と人事とが調和した発句——「野に捨てた笠に用あり水仙花」

——ではじまる『梅ごよみ』の冒頭と好個の対照を形づくるが、このとき一世紀以上を隔てた二人の作家は、どこへゆけばいいのか判らぬ心もとない寂しさを最もよく浮き立たせるための仕掛けとして、あの柳暗花明の巷といふ華やかな別世界を用ゐてゐるのである。かうして吉行の作品は『梅ごよみ』その他に光を投げる。とすれば、われわれが案外、彼の諸作品からの照返しによつて『源氏物語』や『伊勢物語』の新しい姿を見出だす日も、さほど遠くはないかもしれない。

も言ふべきこの形式を根柢からおびやかすに足る悪条件と言はなければならぬ。酒場は文明と様式美を持つてゐないのである。

もちろん荷風には最初からこんなことは判つてゐた。判つてゐながら芸者から女給に転じたのは、その文明と様式美とが花柳界にも失せかけたと彼を感じ取つたためであり、それにもう一つ、花柳界が普通の社会とのいきいきした交流をすでに失つてしまつたと判断したせいであらう。彼はむしろ、秩序ではなく混乱を、趣味ではなく悪趣味を表現し研究しようとして、カフェと女給に向つたのではなからうか。『腕くらべ』の哀切な優雅と『つゆのあとさき』の暗い幻想とのあひだにはこれほどの龐大な距離があるのだ。

そしてここから話が微妙なことになるのだが、女給ないしホステスを扱ふ新花柳小説は、風俗としての完成度が決定的に低いといふ悪条件にもかかわらず、花柳小説の伝統を見えがくれに受けつぐことになつた。伝統の力はそれほど強かつたのである。それに、様式的な洗練といふ点ではすこぶる具合が悪くなつた反面、大勢の男女を一堂に会せしめるといふ点や、一種のフェミニズム、一種の対等な男女関係といふ点では、かへつてこのほうが好都合だといふこともあつた。その背後には言ふまでもなく、戦前はもちろん戦後になつても依然として成熟してゐない日本の市民社会といふ、小説家にとつて極めて不利な条件があらう。大岡昇平が政治小説『酸素』の中絶ののち、銀座のバーのホステスを女主人

公とする『花影』を書いたといふことは、この点はなほだ象徴的な話と言はなければならぬ。日本の小説家は相変らず賤の市民社会を探しつづけてゐるのである。

いや、話をさう単純にしてはいけぬ。新花柳小説の問題には、もうすこし錯綜した局面がある。それは、新花柳小説が果して花柳小説かどうか疑はしくて、しかもそれにもかかはらず花柳小説の伝統を引いてゐるといふ入り組んだ位置が、かへつてよく作家たちを刺戟するといふ事情である。そのとき『花影』の作家は、そして『技巧的生活』の作家は、そのあやふやでどちつかずな性格を最大限に利用して、あるいは逆用して、揺れつづけてゐる戦後の日本に生きる者の不安な心情をまるごとらへようとするのだ。かうしてホステスは、背後に長い伝統を持ちながらその伝統と断ち切られ、信頼すべき確固たるものが何一つない時代に生きる日本人の典型となる。彼女の哀れな敗北も、彼女の健気の自己教育も、みな、鏡のなかのわれわれの姿にほかならない。かうして『技巧的生活』はいはばいかにも吉行にふさはしい教養小説となり、可憐な抒情性と清雅な哀愁の底に思ひがけない頑丈な骨格を示すことになるのである。

ビルの隣りに、コンクリートの壁面がある。その壁に、人間の背くらいの高角い鉄の箱が貼^はり付いている。びっしり一面に、赤く錆^{さび}を吹き出している箱である。その箱から、幾本もの鉛の

ばせたかもしれないし、荷風においては、表面は鬼太郎とまつたく同じやうに斜に構へながら、そして花柳小説そのものの様式的完成に技巧の限りを盡しながら、しかし内心、自分が贗の近代小説を書いてゐることに苦しんでゐたにちがひないといふ氣がする。彼が『腕くらべ』と並べるやうにして、まつたく作風を異にするもう一つの花柳小説『おかめ笹』を書いたのは、おそらくかういふ欠陥をすこしでも補はうとしてであつた。

もつとも、皮肉なことに花柳小説の魅惑の一つは、このへんの事情と深いかかほりがあるらしい。それは厳密な意味での近代小説ではないし、近代小説でないといふことを作者がそれぞれの度合で感づいてゐることによつて、かへつてよく近代日本の社会を柳巷花街といふ一地域に収斂することができるのである。そのとき作者の側の心理の屈折は、むしろ日本の市民社会のゆがみや未成熟と正確に対応することになつてゆく。すくなくとも荷風の花柳小説の勘どころはそのへんにあるやうに思はれてならないのである。そして、大岡昇平の場合、堅氣の主人公と女主人公の戀愛を描いた『武藏野夫人』よりもむしろ水商売の女を描いた『花影』のほうが日本の社会をきれいにすくひあげてゐるとすれば、その理由の一つとしては、このあたりの消息があげられるであらう。吉行淳之介の長篇小説のうち、最も社会小説的な形を整へてゐるものが『銀の鞍』のホステスゆみ子の物語、『技巧的生活』であるといふことも、かういふ事情と無縁ではないといふ氣がする。そ

こには、伊藤整ならばおそらく、これは吉行が新進作家から中堅作家へと變つて行つた過程での体験にもとづく文壇生活の寓話だと評したにちがひないと思ふほど、日本の社会の基本的なパターンがぎつしりと詰つてゐるのである。そして犀利な抒情的処理がかへつて日本そのものを読者につきつけるといふ効果や、作者の知的で屈折した心理がこの一種の社会小説に賦与する陰翳については、吉行の場合、言ふだけ野暮なことにならう。

3 酒場

永井荷風は武田麟太郎の『銀座八丁』を賞讃して、酒場の様子をあれだけいきいきと写すのは並大抵なみたてのことではないと評したさうである。『銀座八丁』は昭和九年の作である。その三年前、荷風は『つゆのあとさき』によつて銀座のカフェと女給とを活写し、まことに感嘆するしかない技倆を示したばかりなのにこの言があるのは、彼が芸者をではなく女給を書くに當つてどれほど苦心したかを示してゐるだらう。それはまつたく新しい領域を手がけるに等しいものだつたに相違ない。

荷風を苦しめた困難のうち最も大きいのは、おそらく、女給とはいつたい玄人なのか素人なのか判らぬといふことだつたはずである。女給には芸者と違つて、完成された約束事がないし、その風俗は不安定で、未熟で、雑駁であつた。これは、新花柳小説と

いふ事情は何も明治文学の発見では決してなく、すでに江戸の戯作者たち、殊に春水がつとに気がついてゐたことであつた。おそらく春水その他の戯作者たちもまた、一種の質の市民社会を懸命に手さぐりしてゐたのであらう。岡鬼太郎や永井荷風はかういふ伝統に包まれ育まれて花柳小説を書いたのであつた。このへんの事情は、

ゆるし詞をいのちにて、思案のほかのほかを行くをなこばかりの色街には、よそに知られぬ道もあるべし。京橋丸屋町の写真屋芙蓉館の西洋室に、テーブルを取巻いて、焙じ茶を飲みながらムシヤ／＼西京焼を食べて居る芸者三人、色の浅黒いきりツとしたる二十七八は桃川の店借おなみ、二十二三の蒼白き瘦ッぽちは越前屋の抱へいろは、ふたりの間に挟まつたるは、十九か二十の色白にて、薦茶屋のこれも抱へ薦菊といふ当世向き、折々ことばじりに妙な訛りの出るぐあひは、名古屋だねと思はれたり。

といふ鬼太郎の『二筋道』の書き出しを見ても、また、

幕間に散歩する人達で帝国劇場の廊下はどこもかしこも押合ふやうな混雑。丁度表の階段をば下から昇らうとする一人の芸者、上から降りて来る一人の紳士に危くぶつからうとして顔を

見合はせお互にびつくりした様子。

「あら、吉岡さん。」

「おやお前は。」

といふ荷風の『腕くらべ』の書き出しを見ても、ただちに納得のゆくことに相違ない。ちなみに春水の『梅ごよみ』は次のやうにはじまつてゐる。

野に捨てた笠に用あり水仙花、それならなくに水仙の、霜除ほどなる陀住居、柁木の垣も間原なる、外は田畑の薄水、心解あふ裏借家も、住ば都にまさるらん。(中略)主は年齢十八九、人品賤しからねども、薄命なる人なりけん、貧苦にせまる其うへに、此ほど病の床にふし、不自由いわん方もなき、容体もとき吉不祥、いと寒けき朝嵐、身にしみ／＼とかこち顔、独わびしき門の戸に

女「すこし御免なさいまし／＼ あるじ「アイどなたエ 女「そふいふお声は若旦那さんといひつつあける障子さへ、ゆがむ敷居にやう／＼と、あけて欠込其姿、

もちろん春水の場合には、これが質の市民社会を描く小説だといふことはいささかも意識されなかつたらう。しかし鬼太郎の場合にはかなり意識されて、むしろそのことが彼のダンディズムを喜

2 風俗

それなのに花柳小説がこれまで注目されなかつた事情については、いくつかの理由を考へることが出来る。まづあげなければならぬのは、道徳的立場からの否定論が意外に強力に作用してゐたといふことである。その典型的なものは赤木桁平の有名な『遊蕩文学の撲滅』だが、ああいふ議論がとにかく発表され、また、注目を浴びることが出来るから、この種の文学的立場は広く世間に根をおろしてゐたと言つてよからう。文学の自律性といふ考へ方は、現代日本文学では根づいてゐないのである。

次にこのことと深く関連するけれども、要するに文士は自分が遊んだ結果を報告してやにさがつてゐるだけではないか、といふ見方がある。すなはち、花柳小説といふ独立した文学的世界を認めやうとせず、あれは単に文士が茶屋酒を飲み女遊びをしたあげく、その体験談に尾ひれをつけただけのものにすぎないと考へる俗論である。このとき小説の題材は作者の体験との関連で眺められるだけで、小説の方法との関連ではいつこゝ考へられなかつた。しかし花柳小説に対するわたしの考え方は違つてゐる。もともと小説といふのは世態人情を描くものだが、その目的には、ちようど西洋では上流社会に舞台をしつらへるのが最も好都合だつたと同じやうに、いやそれよりもつと、近代日本では花柳界が適

してゐた、と考へるのである。これは一般には案外、意識されてゐないことかもしれないが、市民社会が成熟してゐない近代日本では、作家は小説の舞台の設定にはすこぶる難渋することになる。たとへば大勢の男女が一堂に会して談笑するといふ場面など、西欧の小説ではごくありふれた情景なのに、これが日本ではなかなかむづかしい。家庭で夫人同伴のパーティを開くことが戦後の現在でも例外的な風俗であることを思へば、近代日本文学の初期の作家たちがこのへんのことでどんなに苦労したかは容易に察しがつくにちがひない。これでは人間関係のもつれはおろか、登場人物たちを出会はせることさへ不可能である。小説が開かれた社会の叙事詩であるとすれば、閉された社会の叙事詩人である一群の人々は、開かれた社会に似てゐる何かを探さねばならなかつた。そして彼らは花柳界においてそれを見出したのである。

すなはち花柳界は賤の市民社会といふことになるかもしれない。そこでならば、これもまた究極はまがひものにすぎないのだけれどもとにかく恋愛の自由があつたし、さまざまの階層、さまざまの職業の男たちが語りあふこともでき、そのかたはらには女たちがゐた。そして、結局は見せかけにすぎないにしても、一種のフエミニズム、一種の男女平等さへあるやうな仕掛けになつてゐる。なにかんづくすばらしいのは、様式化され洗練された風俗があることで、このため花柳小説には小説が本来持つてゐなければならぬ美的な情趣が添へやすいことになつたのである。もつともかう

ここで考へられがちになつたといふ事情がある。その作品について、維新以後の文学の影響や西欧文学の影響は指摘されても、江戸や王朝の文学との近似は述べられることがなく、はなはだしい場合には、文学作品はただ作者の個性のあらはれといふことになつてしまふのだ。つまり近代日本文学史は伝統意識を欠いた文学史となつた。そして伝統の意識が欠落してゐる文学史といふのは、ほとんど、四角な卵や赤い白鳥と同じくらゐ珍奇なものではなからうか。第三に、まったく同様のことは国文学史に属する作品についても言ひ得るだらう。古典は現代作品からの照返しによつて、そのいまだ知られてゐない局面を明らかにする。それは静止し固定されたものでは決してなく、新しい作品が現れることに変貌し、いよいよ豊かな、そして複雑なものになつてゆくのである。だが、文学史が国文学史と近代日本文学史とに分れた結果、日本の古典はかういふ変貌の機会をとかく失ひがちになつてしまつた。それはいつまでも在来の常識的な評価と解釈の枠のなかにひつそりと位置を占め、いつまでも表情を変へることなく黙々とうづくまつてゐる。これは古典が生きてゐないといふことで、しかも困つたことに生きてゐない古典は古典では決してない。すなはち、明治維新によつて文学史を二分するといふ態度は、日本の古典そのものの生命を奪ふことになつたのである。

もちろんかういふ弊害と欠点とに気づく人々があなかつたわけではない。一部では、かういふ批判はかなり前から口にされてゐ

たし、新しい日本文学史の必要は痛感されてゐたのである。それなのに新しい文学史は、アメリカ人ドナルド・キーンの劃期的な、そしてまことに優れた著作のほかはいつこう試みられなかつた。かういふ状況の背後にはさまざまな原因があるけれども、さしあたり、江戸文芸と日本自然主義以後の小説とを結びつけることの困難が最も大きいと思ふ。よかれあしかれ小説中心の近代日本文学史を国文学史と連絡するためには、やはり小説をもつて主軸としなければならぬことは明らかだが、滝沢馬琴から田山花袋へといふ系譜づくりはさすがにためらはれる。大勢の豪傑が離合集散する七五調の歴史ロマンスから、中年の文士が女弟子に片恋をする口語体の感傷小説へとゆく道筋はいくら何でも突飛すぎてうまくゆきさうもない。かと言つて、民友社の文学と頼山陽とを結びつけるやうな硬文学を主とした態度では、それはそれなりに貴重な視点ではあるけれども、小説中心といふ線からははづれてしまふ。まづこのへんのところで、新しい文学史は最初の難関に達着するのではなからうか。文学史家はそこでためらひ、やむを得ず在来の手口を何となく踏襲することになるやうに見受けられる。

しかし日本文学史が一つの連続体である以上、新旧二つの文学史を結びつけるための手がかりはきつとあるにちがひない。さう考へてあれこれと探すときわたしの心におのづから浮んで来るのは、為永春水から永井荷風を経て吉行淳之介へと至る花柳小説の系譜である。

花柳小説論ノート

1 文学史

日本文学史の最大の不幸の一つは明治維新によつて思ひ切りよく二分されてゐることである。維新以前の、千年以上にわたる長い部分は国文学史と呼ばれ、維新以後のわづか百年は近代日本文学史と名づけられて、名称まで違ふくらゐ両者は異質のものとなされてゐる。この習慣は、国文学史といふ名称がはやらなくなつた今日でも、実質的に文学史家を支配してゐるやうだ。すなはち、西行と石川啄木は別の文学史に属する。上田秋成と志賀直哉は違ふ文学史家によつて取上げられる。いや、維新以後にも活躍した黙阿弥の場合でさへも、真山青果がその登場人物である文学史に姿を見せることがない。これは、たとへば英文学史が『ベオウルフ』からヴァージニア・ウルフまで持続的なものとしてとらへることとくらべて極めて奇妙な現象だし、さらに、日本語の基本的な語彙が『万葉集』のころ以来ほとんど變つてゐないといふ条件を勘定に入れるとき、いよいよ不思議な話とならう。

もちろん、かういふことになつた理由は容易に察がつく。明治維新の結果として到来した西欧文学の圧倒的な影響のせいには

かならない。西方の文学はそれほど新しい刺戟であつたし、しかも当時はたまたま西欧文学がまつたく新しい写実主義の時代に當つてゐたため、それはいつそう異質のもの、いつそう尊敬すべきものとして受取られたのである。すなはち日本文学史は、十九世紀写実主義文学の影響を受ける以前の千年と、受けた以後の百年とに分けられることになつた。それは一応のところ、話を手際よく整理するための便利な手段であつたかもしれない。

だが、かういふ取りきめのせいで多くのことが見のがされたのもまた事実であつた。第一に、これは至つて簡単に目につくことだが、日本自然主義以前、数十年間の文学史が閑却されることになつた。硯友社がそれであり、幸田露伴がそれであり、坪内逍遙がそれである。さらに明治漢詩や『柳橋新誌』や黙阿弥をつけ加へれば、話はいつそうはつきりするだらう。国文学史と近代日本文学史のあひだには、形の上ではいちおう後者に属することになつてゐながらしかも実はどちらからも排斥されてゐる多くの作品が虚しく横たはつて、新しい日本文学史によつて取上げられることを待ち望んでゐるのである。そして第二に、たとへ近代日本文学史にまともな位置を占めてゐる作品でも、この百年といふ枠のなかだけで眺められるため、日本文学の長い伝統と切り離したと

「どうですか。何か書けそうですか」

山本さんが不意に声をかけた。わたしはギクリとした。

「いいえ、まだ考えていません」

どういうわけか、わたしはあわてて答えた。

「こういうバカバかしいゲームの記事というのは書きにくいものですよ。どうですか、アイスコーヒーをもうひとつたのみまじょうか」

山本さんはサービスの女の子をよんで、しわくちやの五百円札を渡した。

グラウンドはまたもピンチだった。二点とられて、まだ塁上にランナーがふたりいた。こんどは監督が出てきて、ピッチャーをベンチにひっこめた。いまひっこめるなら、さっきひっこめるべきだったのだ。その後はブルペンが空になるほど、つぎからつぎにリリーフ投手が登場した。誰も本気で投げているとは思えなかった。

「こんなことをきくのはどうかと思うんですが――」

二杯目のアイスコーヒーを飲みながら、わたしは山本さんにいった。「どうして本当のことを新聞に書かないんですか」

「本当のこと？」

山本さんは困ったように笑った。「そうですね、たぶん誰も本当のことを知りたいなどと望んでいないからです。グラウンドをごろんなさい。ファンや読者は彼らが新聞で叩かれることを望ん

でいないんです。あそこにいるのはみんなスターなんです。あなたもわたしは話した彼らのエピソードを書きますか？」

わたしは返事をしなかった。しかし自分が絶対に書かないだろうということを知っていた。山本さんは黙っているわたしを見てほえんだ。

わたしはそれからしばらくグラウンドのゲームを見なければならなかった。山本さんがこういつて励ましてくれたからだ。

「たとえ十点リードされていても、よくいうじゃありませんか。

野球は何が起こるか分らない」

むろん何も起こらなかった。

かった。

「そろそろリリーフを出したほうがいいんじゃないでしょうか」

「ベンチではきつとそうしないほうがいいと考えているんですよ。

ここはやつひとりに任せろ、恥をかけばつきからはちゃんと投げ
るだろうって」

「ゲームを失っても？」

「もう取り返しがつかないくらい失ってますよ」

「で、彼は立ち直るんですか」

「立ち直るくらいなら、四番打者が怖いなんて女の子みたいなこと
をいつまでもいつてませんよ。試合が終ってから一緒にロッカ
ールームへ行ってみますか？　彼はきつと、中四日のローテーショ
ンできちんと使ってもらえたらなあと思いますよ」

彼はさらに打たれた。一番打者にチョウチョがとまりそうなス
トレートを投げて、スリーランをかまされたのだ。ベンチからは
相変らず誰も出てこなかった。わたしがいらいらしているのを見
て、山本さんはいった。

「彼に任せておけば、あとでやつが打たれたんじゃないかなと
いえるからですよ。なにしろエースですからね。しかしリリーフ
を出して打たれたら、ベンチの継投策の失敗ということになるで
しょう」

彼はさらに三本のヒットを打たれ、もう一点失ってからやつと
スリーアウトをとった。敵も遠慮したのだろう。ひとりのピッチ

ヤーから一イニングに七点も取れば、誰だって遠慮しようという
気になるにちがいない。

「もう帰りましょう」

とわたしはいった。「こんなゲームをいつまで見ていたってし
うがありませんから」

「いや、それがダメなんですよ」

山本さんはわたしを見て笑った。ほんとうによく笑うひとであ
る。いつもニコニコしている。

「まだスコアブックに白いところが残っているうちはね。いったん
この記者席へすわったら、どんなにバカバカしいゲームでも、ち
ゃんと最後まで見なくてはならないんです。昔からそういうこと
になっているもんですからね」

わたしは溜息をついた。

「だから最初にいったでしょう。ここで野球を見るのはつまらんで
すよって」

まったくそのとおりだった。わたしは記者席で野球を見ような
んて気をおこしたことを後悔していた。ここからは何もかもがよ
く見えすぎるのだ。外野席からは選手の背中しか見えないが、そ
こには興奮がある。内野席からは選手のうれしそうな顔やクサッ
ている顔が見えるが、なぜそういう顔をしているのかということ
までは分らない。記者席からはすべてが見えてしまう。おまけに
ここには興奮もない。

わたしの好きな三塁手は二球目を打ってセカンドゴロに倒れ、敵は待つてましたとばかりにダブルプレーにした。彼はたったひとりの百メートル競走をやつて、むなしく一塁ベースを駆けぬけた。

「この回は危険ですよ」

山本さんが、ぼんやりしていたわたしの肘をついた。

「ふたまりめの四番からの攻撃ですからね」

「何とかいけるでしょう。きょうは調子がいいみたいだから」

「まあ見ててごらんなさい。彼はさつきベンチで水も飲みましたね。喉が渇くと彼は我慢ができないんですよ」

山本さんの目におどろいた。わたしはまったく気がつかなかった。

「ちよつとごらんなさい。マウンドの上でグラブをブラブラやつてるでしょう。あれは左翼手にもっとセンター寄りに守ってくれと合図してるんです。四番打者を迎えて神経質になつてゐるんですよ。怖くて怖くてしようがないんです。でも、ほら、左翼手は動かない」

たしかに動かなかった。夜空を見上げたり、足元を見たり、スタンドを見たりしていて、ピッチャーの合図には目もくれないのだ。

「みんなもうゲームに集中できなくなつてきたんです」

山本さんはつづけた。「セカンドベースのところをごらんなさい」

そこでは二塁手と遊撃手が集まつて何かを話していた。ピッチャーが左翼手に合図を送るのをあきらめて、まさにプレートを踏もうとしているのである。山本さんはわたしを見てうんざりしたように笑つた。

敵の四番打者はまもなくたつた四球でフォアボールを選んだ。五番打者はレフト前ヒット。これを左翼手が緩慢な動きで二塁打にした。つづく六、七番にもヒットを打たれて、あつというまに二点を失つた。

「あんなに調子がよかったのに」

わたしは信じられなかった。

「この回は最初から逃げていたでしょう」

山本さんが解説してくれた。「下位打線と上位打線に投げるときではボールの勢いがぜんぜんちがうんですよ。下位打線に対しては一流、上位打線に対しては二流のピッチャーになつてしまふんです。わたしらにもその理由は分りませんがね」

「彼の調子がわるいのは、先発ばかりじゃなくて、リリーフにもまわされるようになったからだ」と新聞には書いてありましたけど」

「だってプロのピッチャーが四番打者に投げるのが怖いからなんだといえないでしょう」

彼は八番打者をピッチャーゴロにうちとつてやつと一死にしたが、つづく九番のピッチャーにレフト線の二塁打を打たれて、さらに一点を失つた。しかしベンチからはコーチも監督も出てこな

「この世界ではそういう余計なことをする人間は嫌われるんです。男らしくないといわれましてね」

「じゃあ男らしいってのはどういうことをいうんです？」

「そうですね。野球界にはこういうほめことばがあるんです。

「やつは偉大な男だ。決して不平や愚痴をいわない」

わたしたちは顔を見合せて笑った。彼らはそういわれるためなら、何でも我慢するのだろうか。まあ我慢するかもしれない。なにしろ、骨折してもそれを隠してプレーすることが美談になる世界なのだ。選手寿命を縮めてクビになるのは彼ら自身なのに。

そのあいだに四番打者がセンター前にヒットをとばした。わたしの記憶にまちがいがあれば、六試合ぶりのヒットである。これで一死一、二塁になり、つづいて五番の若い選手が打席にはいった。わたしがもつとも好きな選手だった。チーム一のハッスルボーイだからだ。先週のゲームでは信じられないようなエラーをやつてのけた。なんでもないショートの真正面のゴロにとびついて、はじきとばしてしまったのだ。球場全体がワツと笑った。なぜなら彼は三塁手だったからである。ゲームが終ったあとで、彼は自分のしでかしたエラーについてコメントした。「ゴロがとんでくると誰かがおれの頭の中で、さあとびつけ、とささやくんだ」それがショートゴロであることはちゃんと分っているのだが、とびつかないではいられないのだそうだ。

「ぼくは彼が好きなんですよ。いい選手でしょう？」

と山本さんにいった。

「いい選手ですね。このチームで本気で野球をやっている唯一の選手です。でもあまり期待はできませんね」

わたしもそれを知っていた。彼は十日ばかり前からひどいスランプに陥っているのだ。それまで三割二分もあつた打率が一挙に三分も落ちていた。たしかこの七試合で十九打数一安打だった。わたしは山本さんにちよつとその知識をひけらかした。すると彼はまたニツコリ笑つて、いった。

「彼の場合はスランプというより、精神的なものでしょうねえ。彼のことをチームメイトが何といつてるか知ってますか？〈ヘアホ〉〈イノシシ〉〈馬車うま〉こうですよ。なかにはひとりで目立ちやがつてと、はつきりいう選手もいますからねえ。そんなこと気にしなければいいんですが、彼はレギュラーのなかでは一番若い選手ですから、どうしてもね」

「バカバカしい」

とわたしは怒った。

「そんなものですよ」

山本さんは困つたような顔で煙草に火をつけた。「スポーツマンシップなんてのは、はじめからないんですから」

「それじゃあ何があるんです？」

「何もありませんよ。野球の世界だけが例外のわけはないじゃありませんか」

を伝統と呼んでありがたがっているんです」

わたしはなんだか厭な気持ちになってきた。このチームは子供のころからの憧れのチームで、わたしの長いあいだの夢だったのだ。勝つときも負けるときもあったが、それぞれの選手を信じ、いつもみんなベストをつくしているのだと思ってきた。ピンチにはフラインプレーを祈り、チャンスには火を吹くようなラインドライブを願ってきた。もしそれを子供じみた空想だというなら、わたしは子供じみた空想を二十年間も抱きつづけてきたのだ。去年調子がわるかったのだって、今年五位にいるのだって、彼らがベストをつくしていないからだなんて思わなかった。ただただ運がわるいのだと信じていたのだ。

「つまらないことを話してしまいましたかな」

山本さんがわたしを見て、気の毒そうにつぶやいた。そういいなくなるような表情がわたしの顔にうかんでいたのだろう。

「そんなことはありません」

とわたしはいった。「でも何とかありますよ。こっちのピッチャーの調子は上々ですからね。ポンポンで終りますよ。そのうちきつと誰かが一点くらい叩きだします」

わたしの予想は当たった。こっちのエースは四回まで、敵をわずかに安打に抑え、それも併殺に切つてとった。そして四回裏、こっちはチャンスを迎えた。二番打者が内野ゴロに倒れたあと、三番打者がデッドボールを受けたのだ。手首にぶつかっただけらしく、

彼は地面をころげまわった。だがそれからの光景は不思議なものだった。トレーナー以外は誰もベンチから出てこなかったのだ。

「チームメートがころげまわってるのに、みんな何してんだろう」

山本さんの顔を見ると、彼は意味ありげに笑った。「こんなにチームがバラバラになっていなんて、思ってもいませんでしたよ」「たしかにそのとおりなんですが、理由がないわけでもないんですよ」

山本さんは二、三度首を振って、溜息をついた。「彼はみんなに嫌われているんです。女のことですね」

わたしは驚いた。プロ野球選手がそんなに潔癖だったなんて知らなかった。しかしバカげたことなのでバカげているとわたしはいった。

「いいじゃないですか、女のひとりやふたりいたって」

「ところが、ひとりやふたりじゃないですよ。自分に近づいてきた女全部となんです。ホステスだろうが女子大生だろうが、とにかくかまわない。なんでもなかには高校生もいるらしいという話ですからね。しかもチームメートと一緒に泊っているホテルに連れてきちゃうんですから。それに彼は練習をしないので有名な選手なのです。ただ監督だけがそれを知らない。監督がグラウンドにやってくると、それまでゴロゴロ寝ころんでいたのが急に起きあがってランニングをはじめますからね」

「誰かが監督に教えてやればいいのに」

か。しかも二球目なんか振っちゃって。ストライクが先行しそうだと見抜いたからでしょう?」

「それは昔の彼が打席に立ったときの話ですよ。いまの彼には相手ピッチャーがいいのかわるいのか見当もつかない。見当なんかつける気がないんだから」

「まさか」

「彼の打率を見てごらんさい。二割四分なんてトップバッターはどこへ行ったっていませんよ」

「スランプなんじゃないでしょうか」

山本さんは唸^{うな}った。

「ちがうんですか」

「盗塁がたったの七個ですからねえ」

山本さんは頬づえをつき、苦笑をうかべた。「打率のほうは調子の波がありますけど、足のほうはね。骨折でもない限り、スランプなんてのはありませんよ。やつなら二十個はしてなくちゃ」
わたしはうなずいた。

「監督が変わってから、やつはずっとこんな調子なんです」

山本さんはうつむいて、煙草に火をつけながらいった。「いまの監督のやり方にずっと批判的だね。ようするにやる気がないんです」

くそ、とわたしは思った。時間のある限り、テレビの野球中継を見てきたのに、そんなことはアナウンサーも解説者もひとこと

もいかなかった。彼は三十四歳だった。だから年齢的なおとろえだとはかり思っていたのだ。

「だったらベンチへおいとけばいいのに」

とわたしはいった。

「そういうわけにもいかないんですよ」

山本さんは笑った。「ベンチへおいといたらおいといたで、文句ばかりいうもんですからね。わたしなんかもそのくちで、だからこうやってこんなところにすわっているんです」

そのあいだに二番打者があっさり三振した。見のがしの三球三振だった。わたしが山本さんを見ると、山本さんもわたしを見た。

「彼はちよつとかわいそうなんです」

山本さんはスコアブックにKという記号を書きいれて、わたしにいった。「監督にはホームランを二十本打てるバッターになれといわれ、打撃コーチにはホームランなんか十本でいいからアベレージをあげろといわれて、どうしていいか分からなくなっているんですよ」

「プロにもそういうだらしない選手がいるんですか」

「たくさんいますよ。とくにこのチームにはね。あと五、六人そういう選手がいます」

「どうせダメになるなら自分の思いどおりのことをやればいいのに」

「そういう自由な空気はぜんぜんありませんね。みんなその窮屈さ

でいたので、三面に小説家や詩人やコラムニスト、それに俳優などが登場するゲストのコラム欄があることを知っていた。わたしは小説を書いている。それで記者席から野球を見せてもらうことを条件に、よろこんで仕事を引受けたのだった。

山本さんはわたしについてきてくれることになったその新聞社の記者で、四十五歳から五十歳までプロ野球担当部長をつとめ、それから再び現場に戻ったというひとである。いまは一般記事は書かずに、コラムを二日に一遍くらい専門に書いている。

「一度ここから見てみたかったです」

とわたしはいった。

「いいゲームになるといいですね。せっかくなのでいただいたんだから」

やさしそうに笑って、山本さんはスコアブックや鉛筆や消しゴムを鞆の中から取りだし、テーブルの上に広げた。わたしはただのノートを広げた。

「でもねえ――」

といって山本さんは煙草たばこに火をつけた。まもなく試合開始だったが、まだホームチームの選手は誰もグラウンドに出ていなかった。

「ここで野球を見るってのはつまらんですよ」

彼は自分の吐きだした煙草の煙に目を細めたが、そのとき、ホームチームの選手たちがいっせいにグラウンドにとびだした。

満員のスタンドから大喚声がわいた。わたしも胸がわくわくした。わたしは彼らのひとりひとりを見て、子供のときのように、あれは誰？ こっちは何ていう選手なの？ などときく必要はもうなくなっていた。二十年間も彼らを眞^{ひま}眞^まにしてきたのである。

こっちの先発ピッチャーは、ここのところ負けがこんではいるが、リーグを代表するサウスポールのエースピッチャーだった。

「きょうは調子がよさそうですね」

ウォームアップを見ながら、わたしはいった。彼は大きなモーションで煙のような速球をつづけざまに投げこんでいた。

「彼はいつもあなんですよ」

山本さんはいった。「問題はバッターが立ってからですね」

しかし彼はバッターが立っても、じつに堂々としていた。山本さんの心配をよそに、わずか十二球で三者三振に切つてとつたのである。わたしは山本さんの顔を窺^{うかが}ったが、彼はニッコリ笑っただけだった。

その裏はこっちの攻撃で、右翼手が最初のバッターとして打席に立った。彼は二球目のボールにコツンとバットを当てて、ショートへのハーフライナーに倒れた。

「敵のピッチャーも調子がよさそうですね」

とわたしは山本さんにいった。

「いや、そうでもありませんよ」

「だってボールをバットに当てるのがやつとだったじゃありません

眼下のゲーム

わたしは子供のころから野球場が好きだった。夏の陽はすでに沈んだが、後方の空にはまだ明るさが残り、はやばやと点灯された六基の照明灯の光が場違いな感じでやわらかく輝いている。そんなころあいの野球場がわけても好きだった。やがてそのうちに、有名な選手たちの背番号が輝きだす。

わたしは野球場のすべてのものを愛した。よくならされたダイヤモンド、外野フィールドの芝生の緑、まっすぐに引かれた白いファウルライン。刻々と迫りくる、胸がはりさけそうなプレイボールの瞬間——。そして、何よりも、ファインプレー。

しかし、ひとつだけ不満があった。わたしのすわっていた外野席からは、ホームベースはあまりにも遠く、外野手の背中しか見えなかったのだ。わたしはいつも、ネット裏か内野席にすわって見られたらなあと思った。

わたしがその望みを実現したのは、それから十数年たってからだった。自分の稼いだ金を使って、内野席の切符を買った。うれしかった。わずか二千円の紙きれだったが、それでもわたしの人生がすこしずつ前進している証拠だった。だがそのとき、ネット裏の高いところを眺めて、もうひとつ特別の席があることを知った。ジャーナリスト専用の記者席である。そこはいかにも眺めが

よさそうだった。一度そこにすわってみたいと思った。どこで見物しようが同じことじゃないかというひとは、野球場で野球を見るといことがどういことなのか分っていないひとである。わたしはチャンスを待った。

「アイスコーヒーでも飲みますか？」

と山本さんがわたしにいった。

「そんなものまであるんですか？」

「おながすいっているんだったら、食事だってできますよ」

山本さんはニッコリ笑った。わたしが断ると、彼はアイスコーヒーだけをサービスの女の子に注文した。わたしは彼の親切に感謝したが、じつをいうとそんなことはどうでもよかったのである。

わたしはそこからの眺めに感動さえ覚えていた。バックネットのまうしろで、ちょうど二階席の高さにあるので、グラウンド全部がきれいに見おろせる。さえぎるものは何もなかった。長いあいだ想像していたとおりの眺めだった。

そう、わたしはついに記者席にすわったのである。

三日前に、あるスポーツ新聞社から電話があつて、ゲストとしてコラムを書いてほしいといってきた。わたしはその新聞を読ん

しゆがんでいた。

「どうしたの」

「どうもしない」

ゴム工場の勤務は、たいへん？ そう聞くと、モウリさんは首を横に振った。

「そんなものぜんぜんたいへんじゃないよ」

それから少し寝入って起きるとすっかり夜が明けていて、見るとモウリさんはぱっちり目を開いて天井を見ていた。

「モウリさん、わたしカスタネット叩くよ」

「そうだね」

「トライアングルもできるよ、きっと」

「そうだね」

線路沿いの部屋だった。電車が、始発のころは三十分に一度、その後は次第に間隔が短くなって、通る。通るたびに、部屋が揺れた。

「このままここにいろのかな」

聞くと、モウリさんは頷くような頷かないような、笑うような泣くような様子をした。

「コマキさん、もう帰れないよ、きっと」

「帰れないかな」

「帰れないなほくは」

「それじゃ、帰らなければいい」

「君は帰るの」

「帰らない」

モウリさんといつまでも一緒に逃げるの。

その言葉は言わないで、モウリさんに身を寄せた。モウリさんは小学生みたいになって泣いていた。カスタネットは赤と青だったなあと思いながら、わたしは泣かなかった。部屋は十分おきに揺れ、モウリさんのからだは暖かった。ふたたび寝入ってしまいそうになるのを一所懸命に我慢しながら、カスタネットのことを思いつづけた。モウリさんは泣きおえて、さきほどの唄をとぎれとぎれにハミングしていた。ここはいいところなのだろうと不思議に思いながら、モウリさんに身を寄せていた。

「じゅうぶんオボれてるじゃない」

「そうかな」

「そうだよ」

足が砂にめりこんで、重かった。角材の上に男が一人座って、ラジオを聞いていた。小さな火を足元に焚いて、競馬の中継らしきものを聞いている。雪は細かくさらさらになつてきていた。

「逃げてる間、ほくたち海ばかり見てますね」モウリさんがぼつりと言った。

「そういえば、海辺の町が多かったね」

「ホヤ食べたいな」

「ホヤ？」

雪はわたしたちの上にも積もっていた。競馬中継を聞いている男はじつと動かずにたたんだ新聞を眺めている。昼なのに夕方のように暗くて、字が読めるのだろうかとわたしたちは言いあつた。モウリさんの腰にしがみつくようにして歩いた。モウリさんは鞆を横抱きに持ち、わたしの歩調にあわせて歩いた。わたしが持ってきた小さな鞆には穴が開いてしまったので捨てて、モウリさんの鞆に二人の荷物を詰めていた。荷物は次第に少なくなり、モウリさんが横抱きをしている鞆はずいぶんと軽かった。雪は波打ち際にまで積もりはじめていた。モウリさんと二人で、長く海岸を歩いた。

「コマキさん、楽器は何か演奏できる」

固い布団に横たわりながら、モウリさんが聞いた。長く逃げてきたすえ、よく知らない西の町の海辺に、部屋を借りているのだつた。モウリさんは町のはずれにあるゴムの工場に勤めていた。三日に一回ある夜勤から帰った日だったかもしれない。窓の外が明るみはじめていた。

「たて笛とカステネットくらいかなあ」

「ぼくはね、アコーディオン弾けるんだよ」

言つてから、モウリさんは鼻唄をうなつた。昔見た映画の中で聞いたような歌だつた。

「小学生のころ合奏部にいたんだ」

「合奏部」

小学生のモウリさんが、遠いところに見えた。カーテンを透かして明るみはじめている外のどこかに、小学生のモウリさんがきつと立っているのだと思つた。

「市の大会に出て、二位になつたよ」

「独奏で？」

「いや」

合奏が楽しいよ。モウリさんは言つた。みんなで音と調子をあわせて厚みのある調べをつくりだすんだよ。そう言つた。コマキさんもこんど一緒に演奏しよう。

急にそんなことを言いだすので、モウリさんの顔を見ると、少

ろだったのだろう。

「逃げるのも疲れますね」モウリさんが言ったのだった。

「そうでもないけどな」答えると、モウリさんは、

「ああ、そうか、逃げることもよりも、逃げるために置いてきたもの
のことを思うのが疲れるんだ」と言った。

モウリさんはどうやら置いてきたものが多いらしかった。わたしは、一つか二つしか、置いてきたものはない。その一つ二つでさえ持て余しているのだから、モウリさんの疲れかたをや、だろ
う。

「死にましようか」モウリさんが言った。

「そうねえ」わたしはあまり考えずに答えた。

そうねえ、というわたしの声が空に消えてから、二人で海岸を歩きはじめた。寒い日に海岸なんか、歩きはじめてしまった。

淡い雪が降っていて、積もったばかりの雪には、何の跡もついでいかなかった。

「死に日和ですね」

「ちょっと死に日和すぎて困ってしまいますね」

そんなことを言いあいながら、浜をずっと歩いた。鴉がどこかで鳴いていた。鴉の鳴き声は遠くにあつても近くに聞こえる。

「コマキさん、生まれてから今までどのくらいのことを後悔しましたか」

モウリさんが珍しく普通のことを聞いたので、これはほんとう

に死ぬのかしらんと思った。

「後悔っていうなら、ほとんどいつも後悔」

こちらにも珍しく普通のことを答えた。モウリさんは頷いたりなんかしている。雪が、淡く白く砂の上に積もっては消える。消えながらもだんだんと白さを増し、そこに波がざぶりざぶりと打ち寄せた。

「ほんとに一緒に来たこと後悔してますか」

いよいよモウリさんらしくない言葉を使う。

「してないよ」

「してないか」

モウリさんは少しほえんだ。それから、

「死ぬのは寒いねきつ」と言った。

鴉がモウリさんの頭をかすめ飛び、モウリさんは、おつ、という声を出して空を見上げた。

「足跡が続いてる」わたしが言うと、モウリさんは後ろを振り向いた。

「続いてるな」

「死ぬの？」

「どうしよう」

「寒い、やだな」

「やだよな」

「もっとモウリさんにオボレたい」

をゆっくりとする。

わたしは、そなえつけの全十三巻格闘熱血漫画を、ていねいに読んだ。客はわたしたちの他には一組しかいなかった。高校生の二人組男子生徒が、全六巻のギャンブル漫画を読んでいた。二人で、一巻ずらして、同じものを読んでいた。片方は親子井、片方は天井を食べていた。肘をついて、井はぜんぜん見ずに箸を使い、漫画本に顔をつけるようにして二人は読んでいた。

モウリさんは食べおわってしまっても、まだそこにいない。よそに行ってしまったている。

「義理と友情のために闘うんだって」と漫画から顔を上げてモウリさんに言ったが、答えがなかった。「義理で、死ぬるかなあ」

モウリさんはわずかばかり目を見開いた。

「モウリさんは、わたしが好きなの？」

聞いてみた。答えが来ないと知っているのに、聞いてみた。答えが来るのだとしたら、聞けまい。

高校生二人は、何か喋りあっている。ギャンブル漫画についてはないらしい、家の隣の誰その姉さんが、などという話をしあっている。モウリさんはしばらくすると、上の空をやめてわたしをじっと見た。

「好きだって言ってるのに、いつも言ってるのに、コマキさんわからないんですか」

そうだったろうか。モウリさんはそんなにわたしのことを好き

だったのだろうか。どちらかといえばわたしが一方的に好きと思いがたに逃げていたように思う。わたしがモウリさんを好きだからこそ一緒に逃けているのだと、いつも思い思いついていたように思う。

「コマキさんは少しばかりですね」モウリさんは湿った声で言った。

「コマキさん、あなた何も覚えてないんでしょう、世の中のこと、何も身についてないでしょう」

モウリさんにそんなことを言われるとは思ってもしなかったのだ、驚いた。幼いころの、ゆらりとした気分が濃くよみがえった。

「モウリさん、わたしばかりかもしれないけどモウリさんのことすごく好きだよ」

「ばかだねえ、まったく」モウリさんは答えた。

「ばかですか」

「だって、これ、ミチユキだよ。アイヨクにオボれた末のミチユキなんだよ、ほんとにさ」

ほんとにさ、と言いながら、やはりモウリさんはほんとではないような顔つきだった。海辺の定食屋のデコラ張りの卓の上には醤油の染みがついていて、全十三巻の格闘熱血漫画は頁の隅がまぐれていた。モウリさんは残ったビールを全部飲み干してから財布をあけ、小さくたたんだ千円札を二枚、大事そうに出した。

一度だけ、死のうかという話をモウリさんとしたことがある。

死のうかという話をするくらいだから、日の射さない、寒いこ

よそしいじゃない。そりゃあれだよこのひとたちわけありだからさ。

わけあり、と言われて、モウリさんは神妙な表情をつくった。ため息なんかをついた。男たちはそれ以上追及することもなく、何杯もおかわりをしては、コマちゃん明日は芋煮てよ、などと言った。後で二人になったときにモウリさんに、

「気がふさぐの？」と聞くと、モウリさんはまたため息をついて、「自転車うまくならないなあ」と答えた。「この仕事、向いてないんじゃないかなあ」

「向いてるも向いてないも」と笑うと、モウリさんは突然のしかかってくる、

「アイヨクにオボレよう」と言った。「今すぐアイヨクにオボレよう」

「もう昼近いよ」答えると、泣きそうな顔になって、

「コマキさんが好きでしょうがないんだ」と言いながら、胸やくびにやたら接吻を降らせた。それから、急いで、アイヨクにオボレた。

新聞販売所で三月働き、いくらかの金が出ると、ふたたび逃げはじめた。

モウリさんはもと上の子になることが時おりあったが、ふたたび逃げはじめてからそれが繁くなった。

一緒にいても、モウリさんはどこかに行ってしまう。そんな時は、どうしてモウリさんについて来たんだかなとさびしくなる。モウリさんを恨むわけではない、自分を恨むような気分になる。逃げだしたのは、つい、だったが、逃げだすことを選んだのは自分だった。モウリさんのせいではない。

幼いころ遊びほうけていて、帰るべき時間よりも遅い時間に家路をたどることがあった。どんなに怒られるだろうかという心配よりも、ゆらりとしたいつもと違う空気の中にいるような、少しうれしいような妙な気分になり道歩いた。どうせ怒られるのだし、どんなに怒られても死にはしない、いつかは死ぬのに違いないのだからと、小学校に上がって間もないころだったのにもう思っていた。モウリさんと逃げはじめてから、その時の気分がしばしばよみがえった。一緒に逃げているモウリさんがどこかに行ってしまうときには、ことさらゆらりとした気分になった。

「モウリさん、おなかすかない」と言っても、どこかに行ってしまうっているモウリさんはなんにも答えない。それで、わたしが先に立って海辺の定食屋かなにかに、入る。逃げているときには、いつでも腹が減っている。皮の焦げた魚やら安手の刺し身だのを、いつだって食べたくなる。

「モウリさん、焼肉定食でいいの」

モウリさんは上の空で頷き、しかし焼肉はモウリさんの好物なので来れば熱心に食べる、食べはじめてから頼んだ一本のビール

を握り返した。モウリさんの鞆の上に載せた小松菜を包む新聞紙がさがさ鳴った。

「この小松菜で泊まれるかなあ」

「どこに」

「親切な雀の家とか」

モウリさんはいつもこんな調子で、わたしはそういうモウリさんが好きみたいだった。好きだから、うかうかと一緒に逃げはじめたのだった。小松菜と新聞紙がさがさ鳴って、親切な雀の家は見当たらなかった。

「南の町だから、暖かいよ」モウリさんは言い、その日は野宿をした。南の町で、暖かいからだのモウリさんに寄りかかって、青草の上で少しだけ眠った。モウリさんは眠らなかつたらしい。翌朝聞くと、一晩じゅうセーラー服を着ていたころのコマキさんのことを想像していたと言う。

「ほんとに？」

「うそだよ」

小松菜は少ししなびていて、モウリさんの髭は一晚でずいぶん濃くなっていた。

「モウリさん、いつまで逃げるの」と聞くと、

「さあねえ」とモウリさんは少しばかりほうけた様子で答えた。

寒くなつて持ち金も少なくなつたころ、しばらく定住して新聞

販売所で働いたことがあつた。モウリさんは配達、わたしは販売所の寮の炊事に雇われた。早朝というより深更とあらわした方がいい時間に、モウリさんは販売所の男たちに混じつて新聞に広告をはさみ、深緑色に塗った自転車で配達にでかける。最初モウリさんは自転車にうまく乗れなくて、夜が明けてずいぶんたつてからも帰つて来なかつたりした。何軒もの家から配達が来ないという電話がかかった。二週間もするうちに、ようやく人並の時間で配れるようになったが、そうなるからモウリさんの自転車の乗り方は、あまり見よいものではなかつた。上体が反り返つて、背はぴんとしているのだが、ぎくしゃくすることこのうえない。

配達を終えた男たちが帰るまでに朝食と夕食を用意するのがわたしの仕事で、毎回一升の米を研ぎ大鍋でひじきやきんぴらごぼうや肉じゃがを作り、業務用の焼き網で何匹もの魚を焼いた。コマちゃん少し味が濃いよ、いやいや俺は濃い味がいいね、などと男たちは言い、コマちゃんと呼ばれると、わたしはとても遠くに来たような気分になつた。モウリさんをそんなときに見やると、茶碗にかがみこんで黙々と嚙んでいた。モウリさんはいつでもたいていそう貞剣な顔をして食べる。以前まだ逃げていないころ、少しばかり高級な料理屋で刺し身やらてんぷらやらと一緒に食べたときにも、同じ顔をしていた。モウリさんは男たちのように、コマちゃん、とは呼ばなかつた。いつでも、コマキさん、と呼んだ。あんたたち、夫婦ものなんだろ、コマキさんモウリさんて、よそ

に背中や腹を撫でにくるモウリさんを押し返しなうと、モウリさんはえへへへ、というような笑い声をたてて、

「アイヨクはだめですか」と言い、わたしをひゅつと裏返した。裏返して、アイヨクめいたことを行つたが、どうもそれはやはりアイヨクとは違ふことのように思われた。モウリさんだとて、アイヨクとは違ふことをよく知りつつ、アイヨクめかしているだけなのではないかと、思われた。

あるときに南に行くトラックに乗せてもらった。モウリさんが道に立つて止めたのである。その前にはわたしが道端で手を振つたが、ぜんぜん止まらなかつた。

「こういう場合、女性が立つた方が止まってもらえるんだと思ひますがねえ」と言いながら、モウリさんが飄^{ひょう}と立つと、すぐさまトラックが止まるのだつた。モウリさんには、そういうところがあつた。トラックに乗ると、モウリさんは運転手と話しこみはじめた。

「へえ。青ものがね。雨少ないし、二週間降らなきや値が。そう」
「娘さん中学生なの。制服、セーラー服じゃないの？　ちかごろはあれよね、スカート短くて、短いのいいよね」「南の方なら、どこでも。人が住んでりやどこでも」

いくらでも話す。助手席にモウリさんとわたしが狭く座つて、運転手はときどき眠そうにしたが、モウリさんがうまく話しかけるので、居眠りはしなかつた。運転手がくれたガムを噛みながら、

モウリさんは空中でハンドルを持つ身振りをした。運転手の真似をして、ハンドルを握っていない方の肘を、窓枠のかわりにわたしの肩にかけ、そうしながら運転手と話しつづけた。

二時間ほど乗つてから小さな町で下ろされた。運転手は、積み荷の小松菜を二束新聞紙に包んでくれた。

「あんたら、どういうの」と聞かれて、モウリさんは真面目に、

「駆け落ちしてるんですよ」と答えた。運転手は表情を変えずに、
「難儀なことだね」と言い、小松菜をもう一束足してくれた。

トラックが行つてしまうと、モウリさんは噛んでいたガムを紙に出し、ていねいに包んだ。

「コマキさん学生のころセーラー服だつた？」　駅方面、と書かれた看板の方向に歩きながら、モウリさんが聞いた。日が暮れはじめていて、こうもりみたいなものが飛んでいる。

「うん」　答えると、モウリさんはさきほど運転手に答えたときと同様真面目に、

「こんど着てみせてよ」と言つた。

「この歳でセーラー服着たらこわい」

「セーラー服好きなんだ、ぼく」

「そういう問題じゃないでしょ」

「問題なんてオソロシイ言葉使わないでよ」

モウリさんはわたしの手を握りしめた。どんどん暗くなつてきて、どこに泊まるのかも知らなかつた。わたしもモウリさんの手

溺れる

少し前から、逃げている。

一人で逃げているのではない、二人して逃げているのである。

逃げるつもりはぜんぜんなかった、逃げている今だって、どうして逃げているのかすぐにわからなくなってしまふ、しかしいつたん逃げはじめてしまったので、逃げているのである。

「モウリさん何から逃げてるの」逃げはじめのころに聞いたことがあった。モウリさんは首を少しかしげて、

「まあ、いろんなものからね」と答えたのだった。「中ではとりわけ、リフジンなものから逃げてるといふことでしょうかねえ」

「リフジンなものですか」ぽかんと口を開けてモウリさんを仰ぎ見ると、モウリさんは照れたように目を細め、何回か頷いた。

「リフジンなものからはね、逃げなければいけませんよ」

「はあ」

「コマキさんは何から逃げてるんですか」

それを、わたしは答えられなかった。ひとつ、逃げてみますか。

モウリさんに言われたので、つい一緒に逃げはじめてしまった。逃げはじめるときにははつきりとわかっていたように思っていたが、逃げつづけるうちに、だんだんはつきりしなくなってしまうた。

「まあ、昔からミチユキだのチクデンだの、そういう言い方あるでしょ。ぼくらもそれですよ、それ」モウリさんは言って、わたしの頬を撫でたりする。

「チクデン」またぽかんとすると、モウリさんはさらに撫でる。

「相愛の男女がね、手に手をとって逃げるっていうことですよ」

「はあ」

手に手をとって逃げていると言われれば、そんな気もした。そんな気もしたが、ほんとうにそうなのだろうか、モウリさんの隣で横たわりながら疑いもした。

モウリさんのからだはたいそう暖かくて、モウリさんに抱き寄せられると、その暖かさのあまりわたしはすぐさま寝入ってしまう。

「失神するみたいにさ」といつかモウリさんに言われたことがある。

「そんなにすぐに寝入るの、失礼なんじゃない」笑いながら言われたことがある。

「せっかくのミチユキなんだから、シニタイとかなんとか言いながらカタクカタクイダキアったりアイヨクにオボレたりしてもいいんじゃないの」

「でもアイヨクにオボレるのはちょっと」アイヨクにオボレよがし

そうやってお婆さんが消えた後。

わたしはカメラをもう一度出しました。明るくなった浜辺を最後に一枚撮るためでした。腰掛けていた岩から波打ち際へと歩いていくときです。なんだか砂浜一面に透きとおる針みtainなものが、チカリ、チカリと動いているような気がしたんです。足元に眼をこらすと、なにかやはり動いている。よく見るとそれはシオマネキでした。

一匹見つけた眼ですこしずつ視野を広げだんだん遠くまで見渡しますと、見える、見える。砂浜中がシオマネキで一杯なのです。そしてあの小さくて茶色で、背中の青い小ガニが、海へ向いて一斉に光るハサミを打ち振っていたんです。

先生。砂浜一面の夥しい数のカニが、チカリ、チカリと海へ向いてハサミを打ち振っていたんです。まるで海恋いの、潮恋いの儀式のようでした。わたしは胸が一杯になりました。ああ、彼女たちはここにいないじゃないか、と……。浜はもうかげろうのように燃えていました」

電話のむこうの声がとぎれた。

ぼくもこちらで黙っていた。その浜の景色が眼の前一杯に広がるようだったからだ。ふうっと、望潮の……、という言葉が浮かんできた。俳句の上の句が忽然と浮かんできた……。

望潮の千のハサミに波応^{こた}ふる。

望潮は春の季語でシオマネキと読む……。

居間へもどるとしばらく茫然と炬燵に座っていた。長いあいだ受話器をあてていた右耳が、熱を帯びて痺れている。

気がつくといつのまにか家内がいなくなっていた。

夕方の買物に行ったのだろうか。

ぼくは出かけるときかならず家内に断るが、家内は出かけるとも言わないし、行き先など教えない。

喉が渴いたので台所へ行って湯を沸かしお茶を淹れて炬燵へ運んだ。

湯飲茶碗へ入れて一口飲み、じっと湯気を眺めていると、ぼくの頭の隅で一瞬シオマネキのハサミが光った。

人で岩に腰掛けて、朝日が真つ赤な雫を垂らし海から昇ってくるのを眺めました。ええ、むろん彼女にもこの際と思い、箱車のお婆さんたちのことを聞いてみました。すると彼女は言うんです。

——さあ、わしは十年前のことはよう覚えんけども、もつとずつと前のことならよう忘れんがのう。

そういえば年寄りの記憶は近い過去より、遠い過去をよく覚えていると本で読んだのを思い出しました。そこでお婆さんの昔のことを聞くと、彼女は若い頃海女だったそうでした。

——亭主もアマでな。

と言うのです。よく聞くと男は海士^{かいし}、女は海女で、それをこの地方ではどちらもアマと呼ぶらしいんです。漁はおもにアワビでこれはずいぶんお金になったとか。途中で彼女の夫は体をこわして海士をやめ、海女を漁場まで乗せて行くトマエと呼ぶ船の船頭になったなどと話します。フネドという海女は一人で潜り一人で浮上するので、船頭は海女が船に上がってくるまでは暇だそうで、釣り糸など垂らして待ってるんだそうです。

——それでええんよ。もともと簗島では、亭主を養えぬようでは一人前の海女でねえと言ったもんやね。亭主を食わせて子供も食わせて舅に姑も食わせてな、それでやっと簗島の一人前の海女ということよね。

そのときだけ彼女は曲がった腰がほんのすこし伸びて、いかにも得意そうに笑って言いました。わたしは聞きながら顔がこわば

りました。一家を養った海女が年とって今度は養われる身になる。それはずいぶん不本意なことじゃないかと思えますよ。そのときハッと命と引き替えに孫に車や晴れ着を買ってやろうとする箱車の当たり屋のお婆さんたちの姿が、わたしの眼にだぶりました。

——あの頃は女もサイジという褌^{ふんどし}一つで潜ったもんよ。大きな毬のような奴の乳をみんな水の中でブランブランさせとった。アワビ袋を腰にさげ、フタツ眼鏡に鉄のカイガネ握ってな。

——そんなお婆さんの仲間の海女さんたちは、今どうしていらっしゃるんですか。

——もう、おらんな。死んでしもた。わしが最後かな。

並んで座っているのですが、横を見てもお婆さんの首はないんです。小さいからずつと下のほう、わたしの胸のもつと下に、それも腰が曲がってるため前のほうに彼女の首は突き出ています。海に向いて、齒のない口で屈託ない顔でした。

——五体が海を覚えとるんでね、こうしとると潮がなでる気がして、あたり四方が海になるんやね。ええ気持ちよ。

皺だらけの薄い臉^{まかた}をヒクつかせます。わたしもお婆さんのそばに縛られたように腰かけたまま、二人で日の出を眺めました。

朝日がすっかり昇りきる頃、彼女は腰を上げ杖について浜を引き揚げて行きました。車で送ると言ったのですが、どうしても聞かず歩いて帰ると断りました。竹の杖が長いため林の道へ遠ざかる彼女のつの字の姿は、まるで竹竿だけが動いて行くようでした。

「それじゃ、やっぱり隠しているのでしょうか」

「あれだけの数の婆さんたちが道に出ていたのを、たった十年やそこらで島の者全員が忘れるはずはないだろうからね」

ぼくは寒々とした気分になった。

昔ぼくとぼくの吟行仲間が、箱車を押して死の彷徨を続けていた老婆たちと出会ったこと。十年後にそれが跡形もなく消えていたこと。この二つの事実だけがある。しかし、これ以上は島と関わりのないぼくたちが、真相を究明することはできない。その必要もないのかもしれない。すべては終わったことである。老婆たちがどのようにして姿を消したか、消え方は曖昧でなんだか後味も良くないが、消えたことだけは幸いだった。あんな凄いことがいつまでも続いてはならないのだ。

「有り難う。それで充分だ」

ぼくがねぎらうと増川は自分でもふんざりがついたのか、すこし声が明るくなった。

「でもね、先生」

と電話のむこうで微笑んでいるようだった。

「わたし、帰る日の朝、一人だけお婆さんと出会ったんです」

「どこで」

「宵っ張りの怜子はまだ寝ていたの、もう一度一人で猿岩ノ浜までレンタカー運転して行ってみたんです。朝日がとてもきれいだ」と民宿の奥さんが言っていたからです。早朝の簗島の道はガラ

として、特攻お婆さんさえいなければ、たぶんペーパードライバーでも走れるくらいです。

車から出て浜へ降りると、海はもう日の出で真っ赤でした。長く海まで続いた砂浜は昇りかけた太陽の光線で、人の足跡や風紋が影になっていちめん赤と黒のまだら模様でした。パノラマの使い捨てカメラを持ってきていたので、海の朝日を何枚も撮っていたんです。するとファインダーの中に波打ち際の右手のほうから、奇妙な人影が入ってくるのを見ました。

朝方の寒さに綿入れの袖無しを着た、ほとんど二つに腰の折れ曲がった、小さいほんとに小さい影です。白い手拭いを頭にかぶり、もんぺ姿で草履履きです。すぐ近くの家のお婆さんみたいでした。特攻のお婆さんかって？ いいえ、箱車は押していなかった。長い竹の杖をついて波打ち際に沿って、ゆっくりと歩いて行くんです。思わずシャッターを何度も切ると、気配でお婆さんがわたしのほうを向きました。

彼女は立ち止まってコックリ頭を下げお辞儀をします。声は遠くて聞こえなかったけど、おはようございますと挨拶をしているようでした。それでわたしもカメラをバッグにしまつて、お婆さんのほうへ近寄って行っただけです。そうですね、齢の頃はもう八十歳をだいぶ超えているようでした。だって、先生がおっしゃった、あのエビのようなつの字の腰ですもの。

彼女は毎朝この浜へ日の出を拝みにくるのだと言いました。二

る道が続いているだけでした」

「そうだったか……」

とほくは電話につぶやいた。

やはり、という気もした。そのやはりには確たる根拠はなく、漠然とした予感だった。いくら年寄りのやる行為でもあんな無法は島としても放置できないだろう。警察か町役場が取り締まりを行ったのかもしれない。

「そうか、もうあの婆さんたちは消えてしまったか」

ほくは電話にうなずいた。増川は気の毒そうに続ける。

「それで猿岩ノ浜へ行く途中寄り道して、昼の食事に入った海沿いの小さな食堂や、フィルムを買いに入ったカメラ屋、雑貨屋から駄菓子屋まで行く先々で、お年寄りはどうしているのかそれとなく聞いてみたんですが、駄目でした。

猿岩ノ浜は遠浅の美しい砂浜でした。浜の裏手に小さな岩山があつて、獣の形に似た奇岩が何十となく海を向いて突き出ていました。浜の近くの草原に車を停めて波打ち際まで歩いて行つたんですが、そこで人影を一つ見つけました。近づいて行くと漁師風のお爺さんです。彼は袋をさげて貝でも獲って帰るところみたいでした。

わたしたちはこの年寄りなら何か教えてくれるかもしれないという期待を抱いて、思い切つて尋ねてみました。

——昔このあたりに、箱車を押して歩いてたお婆さんたちの

ことをご存じありませんか。

箱車？ と彼は潮焼けした顔でわたしたちを眺め、それはどんな車かね、と当惑したように聞き返すんです。木で作った簡単な手押し車ですと説明すると、

——いったいそんな話を誰から聞いたのかね。

と白髪頭をかしげて、詰問するような厳しい口調です。彼の頭の毛はキラキラ光る塩粒をまぶしたようで、眉もまつげも半白でした。

——そんな年寄りは見たことがないね。

そう言うのと足早に立ち去って行きました。

波打ち際を歩きながらわたしたちの意見は二つに分かれたんです。怜子はみんな島の恥になるから隠しているのだ、と言いました。わたしは島の人たちは本当に知らないのではないか、と言いました。だってあそこの人たちはなんだか表情に乏しくて、そのうえ飾らないでぶっきらぼうですから、顔を眺めてもよくわからないんです。厚い岩の奥で何か音がするのに表まで伝わってこないような、そんなもどかしさです」

そして増川は言い淀むように言葉を切つて、
「先生、もしかして簗島でなく、どこかほかの島の勘違いではありませんか」

と言いくそうに聞いた。

「いや、簗島だが」

そうだね、とぼくはまた相槌を打つ。増川と大場はもうすでにぼくの知りたいことを見てきたのだ。ぼくの頭の中ではこの十年間おりにふれて、島の老婆たちは箱車を押してずっとさすらい続けたままだった。今から夢の袋に手を入れて中味を引きずり出すような気分だった。しかし、それを頼んだのはこのぼく自身だ。

「で、……」

とぼくは短い息を吐いて、聞いた。

「どうだったかね」

あれから十年経っている。

「ええ。ちょうど栈橋のそばにタクシーの営業所があって、予約している民宿まで乗ろうとしたんですが、隣にレンタカーもありました。たちまち運転の好きな怜子がこっちのほうが自由がきくからと言いついて、そこでわたしたちはちょっと言い合いをしたんです。

だって当たり屋のお婆さんたちに出会って、そして人身事故でも起こしたら大変じゃありませんか。でも怜子が小声で言うんです。慎重にやるから委せてよ、それにあんまり危なかったらレンタカーも貸し出ししたりはしないと思う、って。そうかもしれないとわたしも考え直しました。

それで島に一台きりという古いトヨタのマークⅡに乗って、営業所で教えてもらった民宿へ向かったんです。民宿は海沿いの一本道を五キロほど行った村にあって、とろとろ走りましたが見渡

す限り海と浜とワカメだけです。

先生のおっしゃったように島はワカメ漁の真っ最中で、道筋はワカメだらけで潮の匂いがきつく生臭いほどでした。あれは真っ黒に照り光って、わたしには髪の毛というよりも、沢山の黒い蛇の群に見えました。うじゃうじゃして気味が悪くて、なんだか今にも這い出しそうでした。

そしてとうとう人間どころか猫の子一匹にも会わず、わたしたちはぶじに浜崎っていう民宿へ着きました。そこは漁師の家で、民宿といっても裏の倉庫を改築したような二室があるだけです。夏はもっと客がくるのでしょうか、今はわたしたちだけでした。日焼けした奥さんが部屋へお茶を持ってきたので、わたし何気なく聞いてみたんです。この島はお年寄りがすくないんですか。道でもまるで出会わなかったけどって。すると彼女はなんでもない顔で答えるんです。

——年寄りは一杯おりますが、みんな家で子守や留守番をしとりますから外で姿を見ることはないですよ。

もうすこし聞きたかったけれど、奥さんは浜のワカメ干しに行くとかで、忙しそうに出て行きました。海女の仕事もやっているのだそうです。

民宿にボストンバッグを置くと、わたしたちは彼女に猿岩ノ浜という名所を教えられてレンタカーで出かけました。ほんとに途中でも年寄りの人影はまったくありません。海ばかりギラギラ光

彼女は老眼鏡越しにぼくを見て、

「箕島へ行ってきた、とか聞こえましたけど」

とうるさそうに答える。

「またかかってくるでしょうから、電話のそばにいて動かないでください。あたしが立って行くと、どこまで読んだのかわからなくなりますから」

ぼくは電話のある隣の部屋へ行き腰をおろした。増川恭子は年末にぼくが話した箕島のことを覚えていて、それで行ってきたのだろう。ほどなく電話が鳴った。

「先生ですか。増川恭子です。大場怜子と二人で、いつか先生のおっしゃった箕島へ行ってきたんです。それで早くご報告しようと思ひまして」

この子の声は低くてもよく通る。コーラス部にいたのだと思ひ出した。ぼくが頭の中に思ひ続けていた年数に比べると、若い者たちの行動はこんなに速いのだ。

「先生に話をお聞きした後、友人や知人たちに最近箕島へ行った者がないかいろいろ尋ねてみましたが、あの近くには宿根島というレジャー設備のある島もあって、箕島はあまり知られてないようでした。それで土日を利用してわたしたちが行ってみることにしたんです」

増川も大場も今年四十七歳の主婦である。二人に限らず同期の生徒のうち早生まれは、つまりみな四十七歳だ。増川は会社員の

夫と男の子が二人いて、夫もそこに昇進し、息子たちもそれぞれ大学へ入り、週に何日か経理のパートをやっている。まずはほどほどに不足のない暮らしのようである。大場は子供がいなくて確か夫婦とも公務員だ。この子は陸上の短距離の選手だった。

「箕島行きの出る戸崎港まで電車で行って、そこから片道二時間半の船で、まだフェリーも高速船も通ってなくて昔のままです。出発したのは四月十日で、一泊二日の短い旅でしたが、見てこれるものは全部見てきました」

増川の柔らかな息が受話器から流れてきた。そうか、そうか、ご苦労さんだったね、とぼくは電話の前で有り難い気がして頭をさげていた。眼の前に箕島の仏飯みたいな青い小さい島影が浮かんだ。

「海を見るのはひさしぶりのことで、先生、わたし子供みたいに感動してしまいました。おかしいけど、あたり一面水だらけ。海ってほんとに海水で満杯。泳ぎが苦手なのでどうしても波の下は何百千メートルの深さと、そこに詰まった海水の量を想像するんです。まるで水地獄。そしたらそのうえに浮かぶ島々なんて、どんなに陸に近いものでもやっぱり孤島っていう気がしました」

そうだね、孤島だねえ、とぼくは多少興奮気味の増川に相槌を打った。

「そしたら島では、陸で考えられないようななんことが起こっていても不思議でない気がしました」

帰りの船中でそれがまた話題になったらしいが、先生は前に言ったように、酔って船室の長椅子に倒れ込んでいたそうだった。

その老婆たちは若い頃きつと海に潜っていたのだろう、とわたしは思った。潮に鍛えられた海女の体は老いても強靱で、彼女たちはきつと長寿なのだろう。そしてそのしぶとい命を車に投じ、孫の新車や晴れ着に替えるのだ。先生はわたしたち三人の女性組を見て、君たちならどうだろう？ やれるかね、と教室で生徒を当てるような調子で尋ねたが、わたしと両隣に座っていた大場怜子や砂川美佐子なども、とんでもないとかぶりを振った。

「できないか」

「できません」

古海先生はすこししよげた顔になった。

「ふむ……。ぼくは帰ってから老婆にこの話をして、おまえはどうだと聞いた。すると家内はケラケラ笑って、ええ、あたしも篠島の老人会に所属していたらやると思いますと答えた。ぼくは老婆の顔を見て、こいつがこう言うならやるかもしれないと思った。根拠はないがふとそんな気がした」

みんなドツと笑った。先生の奥さんの気難しそうな皺深い顔が眼に浮かんだからだ。

「それで、島ではどんな句をつくられたんです」

吉開が聞き、先生はしばし宙を眺めて口をひらいた。

「忘れ潮も老婆も消えて暮れ遅し」

暮れ遅し、というのが春の季語だそうである。

四月。陽春。

昼過ぎ頃、

「あなた！」

と奥から呼ぶ声がした。

「あなたったら」

と二度目はその声がきつくなった。

「聞こえているんだったら、返事してください！」

だが聞こえていても答えられない場合もある。

「どこにいらっしゃるの？ クラス会の増川さんからです」

ぼくは相変わらず黙っていた。受話器を手で塞いでいても、こちらの声はむこうに多少は洩れてしまう。齢をとることにぼくの妻は性格が荒くなっていく。ちよつと電話を置いて探しにくければ大声を出さなくてすむのだ。用を足して居間へ行くと、すでに電話は切れていた。

増川恭子は、大場怜子と長いことクラス会の会計をやってくれている。なぜかこの生徒たちとは縁が続き、暮れには忘年会を兼ねた喜寿の祝いをしてもらった。年が変わって新年会もやったし、もうとうぶんなにもないはずだ。

「なにか言ってなかったか」

電気炬燵でいつものように小説本を読んでいる妻に尋ねると、

運転手はあたりを見張りながらいつでも急ブレーキをかけられる態勢で行く。ほくらもシートに腰掛けたままショックに応じられるように身構えていたよ。それで、さすがの婆さんたちもなすすべもなく見送った。それくらいのスピードじゃ飛び込んでも怪我するくらいで死ぬるはずがないからね。彼女たちの願いはひと思いに死ぬことで、下手に怪我して命拾いしたのではこまるわけだ」

「まるで戦時中の、一機一艦突撃の特攻機ですね」

吉開が呆れたように言った。

「その晩は島の宿で句作より、その特攻婆さんの話題でもちきりになった。ぼくらのグループには女性の年配者も多かったからいろいろ話も出たが、結局みんな想像を絶する行為としか言いようがなかったね。」

翌朝は帰る日で、ぼくらは午前十時の船に乗るため棧橋へ向かった。その朝も海沿いの道には、車を狙う婆さんたちが大勢出ていた。浜をのぞんだ明るい町道だった。やはり道の脇にはワカメの黒髪が生きものみたいにうねっていた。海の精気がガラガラと発散していた。

あのワカメと婆さんたちの姿のある風景は、どういふのかな、海藻のなまなましい精気と年寄りの枯れ果てた老残とがあまりに対照的で、なんだか眼にもむごたらしい眺めだったような気がする。ワカメは婆さんたちの若い日の黒髪のように、まるで過去の

思い出の中を彼女たちは歩いて行くんだな。というよりも婆さんたちの行進の背景に、黒髪の記憶が不可思議な絵のように流れていた。

行き交う車は彼女たちを轢かないように、牛の列みたいにのろのろ進む。車のあいだを箱車の婆さんたちは亡者みたいに蹣跚と横切って行く。異様な光景だね。箱車によるめく体を預け、平べったくてひしゃげた恰好で行くんだよ。

婆さんたちのせいでもなくて車の量も多くない小島の道が、ときならぬ渋滞になる。そのとき、五十くらいのタクシーの運転手だった、ハンドルを握ったままフロントガラスのむこうをそっと顎で示して言ったよ。

——あの年寄りの中には、うちのお袋も混じつとるんです。

だがぼくらには、彼の母親がどれなのか見分けることはできなかった。

——止めても止まらんですよ。毎日朝飯を食うといそいそと家を出て行くんで、まるで仕事のようじゃと女房が嘆いとります。本島の高校へ行つとる倅に、卒業して就職したら婆ちゃんが車を買うてやる、姉娘には成人式の晴れ着を買うてやると言うとるです。まさか家の戸に鍵かけて閉じこめておくこともできません。それで運転しとつても、自分の親を轢きそうで気が気でないんです」

古海先生はヒラメの刺身を口へ入れた。

たちは群をつくらず、ばらばらに独りで歩いて車を物色するんだ。なるべく補償金の沢山出そうな車を狙う。自分たち島民の車や漁港のトラックは避けて、町役場の公用車とか、銀行、郵便局、それに島へくる観光客の乗ったタクシーやレンタカーを標的にする。

あれは町役場から五百メートルも離れていない崖っぷちの道だった。吟行仲間は十人のグループでね、三台の島のタクシーに分乗していたんだ。ぼくは先頭の車に乗っていたが、フロントガラスのむこうになんだか小さい人影のようなものが一つ、チョロチョロしている。だが人間にしてはひしゃげている。とにかく奇妙な影なんだよ。見るなり運転手が急にスピードを落として徐行し始めた。

——また、カニが出てきた。

と運転手がつぶやいた。ゆっくり進んで行くわれわれの車を、影は道の際に立ってじっと窺っていた。近づくとそれは老婆なんだ。道端に身をよけるでもなく箱車を止めて、つの字の恰好で佇んだままこちらを無念そうに見送った。

四、五百メートルも行くと、またおなじような影が道に現れる。箱車を押して道の真ん中にチョロチョロ出てくる。ぼくらのタクシーが近づいても道の真ん中で動かずに立ったままだ。運転手がクラクションをたて続けに鳴らして、ようやくのろのろ道の際へ退いた。いったいこの年寄りたちは何なのかと驚いていると、運

転手がしかたなさそうに言った。

——磯のカニとおんなじで、あとからあとから這い出てくるとですよ。

平べったくて小さくて、實際婆さんたちはゾロゾロ浜から這いあがってくるカニそっくりだった。

島の恥を言いたくないがと運転手がうちあけるのに、この婆さんたちは車に轢かれるため毎日出てくるのらしい。それも一人や二人ではなく、何十人もがそうやっている。当たり屋は補償金目当てだから怪我をしても最低自分の命だけは守ろうとするが、婆さんたちは死ぬために本気で突っ込んでくるため始末が悪い。

——長生きして家の者に迷惑をかけるより、ひと思いに死んだほうがええと思うんですかね。そのうえ家族には結構な金が出ますからねえ。

年寄りは生きて孫や子の助けになれない代わり、車に轢かれて死ねばまとまったお金を遺してやることができるんだな。本当の命を張った当たり屋だよ。誰が最初に始めたのかわからないが、たちまち島じゅうの婆さんにそれが蔓延したわけだ。婆さんたちは群をつくらず単独で行動するんだが、車に飛び込むのに地の利の良い場所というのがあって、どうしてもそこに集まってくる。海沿いの道は絶好の突撃場所なんだ。この頃は運転手たちが用心するおかげで減ったが、数年前までは月に二、三人は轢死していたという。

「玄界灘は波が荒い。ぼくは船が苦手なんだ。あのときも吟行仲間に葉飲めば平気だと騙されて、行きはどうか保ちこたえたが帰りは死人同然だった」

「船酔いの辛さは酔った者でないとはわかりませんからねえ」

横田がうなずいた。彼もじつは船だけは駄目らしい。

「それでもしこの中でいつか簀島へ行く者があつたら、見てきてもらいたいものがある」

先生は薄い唇に盃の酒をふくんでゴクリと飲み干すと、わたしたちの誰にともなく言った。

「ワカメですか」

「いや、いや。ワカメやヒジキのたぐいではない。人間だ。人間の婆さんをね、見てきて欲しいんだ」

「そのお婆さんは毛生え島に住んでいるんですか」

「うん。簀島の老婆たちなんだ」

古海先生の話は急に飛ぶ。昔の授業でも源実朝の歌の、箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ、から源義経とジンギスカンを経出してなぜか『千夜一夜物語』でベルが鳴ったりしたものだ。

先生はテーブルに肘を突いて横座りしたまま、盃を再び口へ運び記憶をほどこしながらしゃべりだした。

「ぼくがその婆さんたちを見たのは、ワカメのぬるぬる光る海沿いの道だった。手拭いを頭に姐さん被りして、粗末な服にもんぺを

はいていた。ちょっと浜まで出かけるような恰好だ。ほとんどエジミたいにつの字に曲がった腰。つ、の字の先つちよに小さい頭が乗っていて、つ、の字の下に二本の短い足がついている。

その体じゃ歩くのが難儀だから、幼児の歩行器みたいに手製の箱車をゴロゴロ押して歩いて行く。四角い木の箱に古自転車車輪をくっつけた手押し車だ。それでゴロゴロゴロゴと、平気で海辺の車の走る道へ出てくるんだ」

「危ないなあ。そんなものを押して、いったいお婆さんたちはどこへ行くんです」

吉開が口をはさむ。

「どこへ行くあてもない。婆さんたちはそうやって毎朝家を出ると車の通る道へ出かけて、獲物を狙うんだよ」

「タクシー強盗？」

わたしの隣の大場怜子が素っ頓狂な声を出したので、座は大笑いになった。古海先生だけ磯に打ち上げられて弱ったイカみたい

に、黙然とテーブルへ斜めに寄りかかっている。

「あたらずとも遠からじだ」

先生は微苦笑した。

「彼女たちは車の当たり屋なんだ」

わたしたちが黙る番だった。先生はカラの盃に自分で酒をつぎながら言う。

「信じられんことだが、簀島でぼくはそれを見てしまった。婆さん

望 潮

わたしが簗島の話聞いたのは師走の魚屋の二階でだった。

「えーい、ヒラメ、ヒラメ、ヒラメ。イカにせき関サバツ」

昼下がりの小座敷はわたしたちのほか客もなく、下の店から魚の売り声がときおり上がってきた。

その日は古海先生の喜寿の祝いと忘年会を兼ねた集まりで、十人ほどが顔を並べた。視力の弱った先生のため夜の会を日中に変えたのだ。障子の外が明るいので酒席は静かでなごやかだった。古海先生は齡のせいで盃二、三杯の酒にもうテーブルへ肘を突いた。そして簗島の話が始めたのだった。

「今から十年くらい前、ぼくは俳句の仲間たちとあの島へ出かけたことがある。春先はワカメ漁のシーズンで情趣もあつて、つまり吟行の旅だ。海辺の道には浜の小石が敷き詰められ、その上にワカメが干してあつた。ぬるつと光る真つ黒いやつがね、海から打ち上げられたようにゾロゾロ並んでいた」

刺身醤油に染まった割箸の先で、先生は宙に島の図を描きながらしゃべる。周囲七十キロメートル、人口五百人余の玄界灘の小島が、ぼんやりわたしたちの鼻先に浮かんだ。

「ワカメは海から上げたときは褐色だが、すこし乾いてくると真つ黒になる。その長くて黒いやつがとぐろを巻いて道べたを埋めて

いる。春先はまるで島全体が毛を生やしたように見えた」

毛の生えた島などと言うと淫靡である。そして先生が話すところうえ変におかしいのだ。古海先生は昔から体を真つ直ぐにしているのが苦手で、背骨のちようつがい、が外れているんじゃないかと思うくらい姿勢が悪い。若い頃に何か大病をしたという話も聞かないから、きつと先天的にくねくねした体つきなのだろう。

「島はいいなあ。獲れたての魚がたっぷり食えるよな」

と横田泰典がコップ酒を手を言う。

古海先生はもう三十年ほど前、高校三年のときわたしたちの担任だった。当時からみように老人臭かったが温厚柔和で、大学受験期の神経質な時期をわたしたちのクラスは比較的平静に通過することができた。二学期も終わり頃になると彼の国語の時間は自由学習へ変わり、教卓の先生一人ぼそぼそと古文を読んでいた。

「みんなで来春はその毛生え島に行きましようか」

クラス会の幹事の吉開敏夫が言った。老齢だからつれて行くなら今のうちだ。しかし先生はズボンの長い足をしどけなく横座りして、

「だめなんだ、ぼくは行けない」

と情けなさそうに言った。

小説

「望潮」

「望潮」

文藝春秋

村田喜代子

..... 1

「溺れる」

「溺れる」

文藝春秋

川上弘美

..... 12

「眼下のゲーム」

「スーパースター」文藝春秋

海老沢泰久

..... 20

評論

「花柳小説論ノート」

「星めがね」

集英社

丸谷才一

..... 28

「ジャーナリズム」

「林達夫著作集6」平凡社

林 達夫

..... 35

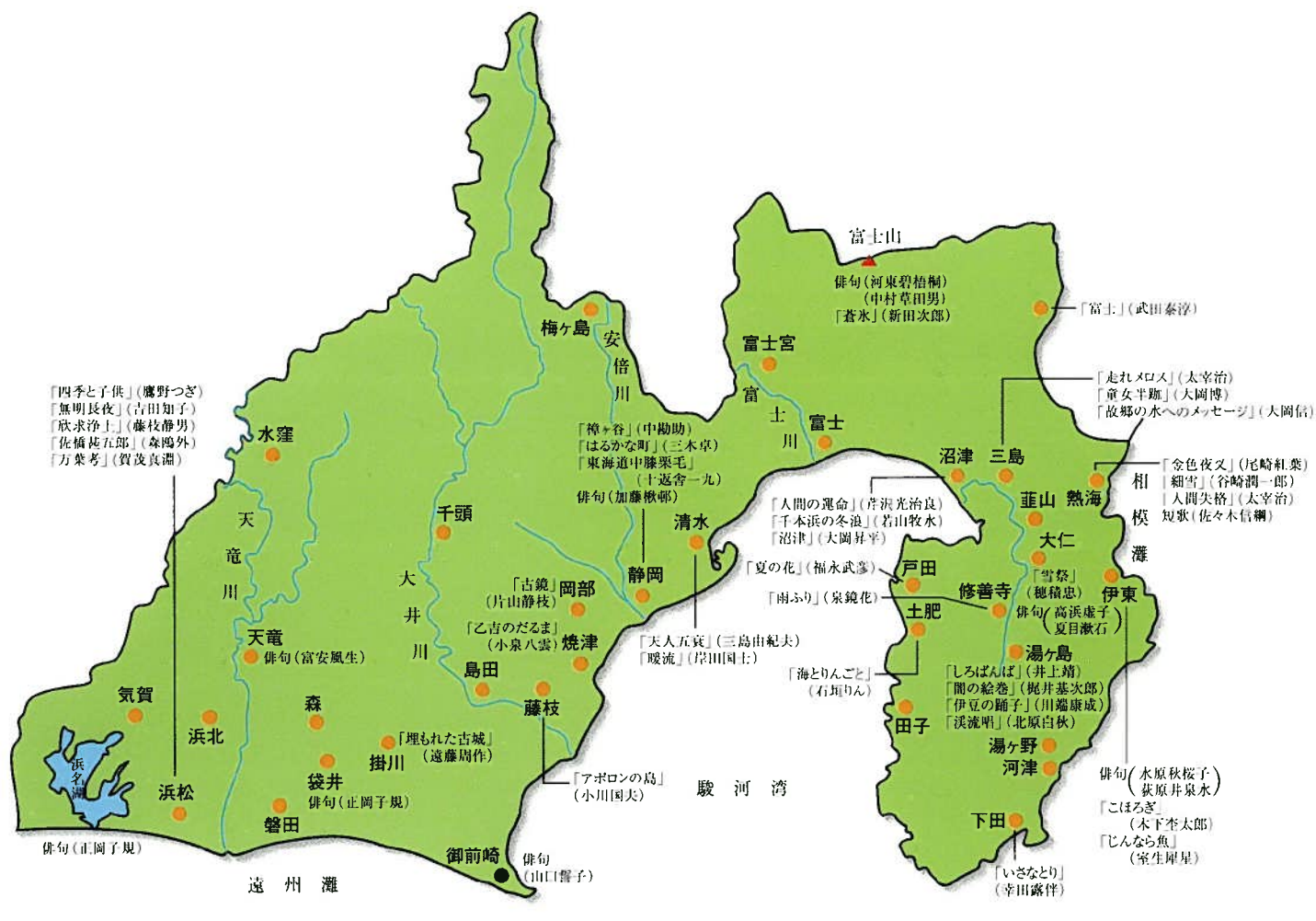
「美しい言葉とは」

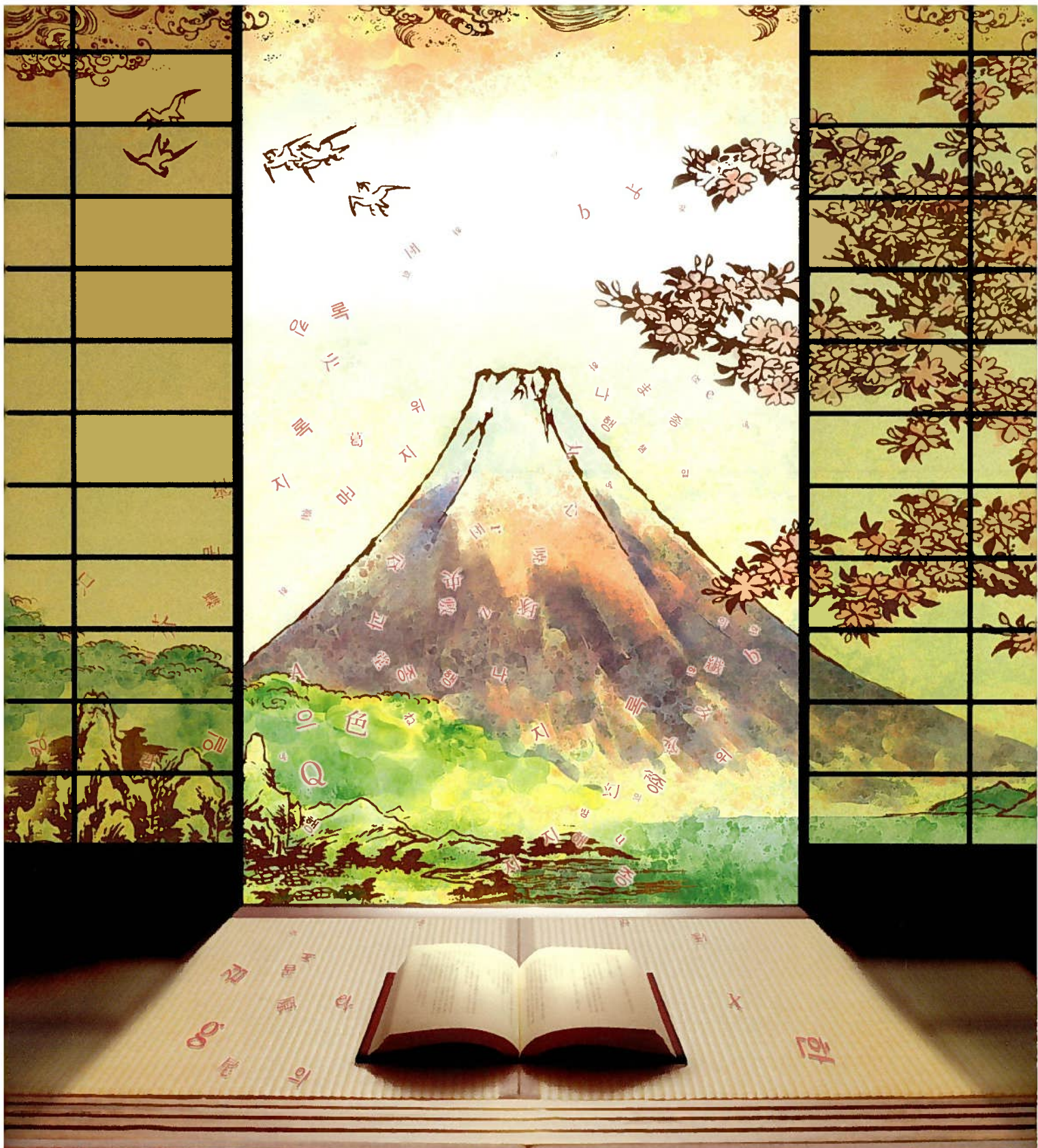
「言の葉さやげ」花神社

茨木のり子

..... 45

静岡県文学略地図 (近代文学)





第4回しずおか世界翻訳コンクール

2001-2002, 静岡

The 4th International Translation Competition 2001-2002, Shizuoka, Japan

제 4회 시즈오카 세계 번역대회 2001-2002, 시즈오카, 일본

翻訳課題図書

Texts for Translation

번역과제도서